気がつけばそこは――

ようせいさん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気がつけばそこは見知らぬ家の中。

一人、俺を呼ぶ声が聞こえる。

目を開ければそこには一人の少女の姿が。

その姿を目にした瞬間、俺は思わず呟いてしまったんだ。

――キャストリアじゃん、ってね。

二部六章読んでてＦＧＯの話が書きたくなったけど、一部から書くのがだるいからすっ飛ばして最新の二部六章で始まれば一番書きたいところ書けるんじゃね？ってなって今に至る。

注意：二部六章のネタバレを含みます。

二部六章未読の方はあまりお勧めしません。

拙い文章ですが以上のことを踏まえた上で、それでもいいよーっていう方はどうぞ。

目次

一話 …… 1
二話 …… 12
三話 …… 23
四話 …… 35
五話 …… 45
六話 …… 55
七話 …… 64
八話 …… 74

一話

――よかった。気が付いたんですね。
俺が無事なことを喜ぶ女性の声が聞こえる。
一体誰なんだろう、少し気になった。
大事な人達の名前。その姿や声。その仕草、それら全てを深い深い霧の中に全部置いてきてしまったような気分になりながら、俺は意識を取り戻し、閉じていた双眸をパッと開いた。
一番最初に、俺の視界に映ったものは見知らぬ部屋だった。
そこは、簡易的に組み立てられたどこか素朴でいて質素と思わせる、ログハウスのような部屋。壁は布かなんかで代用してある。
どうやら俺は、ベットに散りばめられた木の葉の布団の上で寝ていたようだ。少し体が痛い気がした。
そして次に見たものは1人の小柄な少女だった。
灰色のキャスケット帽にふわりとした金色の髪。
両脇が見えてしまっているがどこか研究者を思わせる白い服を身に纏っている。宝石のような翡翠色の双眸は、ただ真っ直ぐ、俺を観察するように見つめている。
聞き覚えのある声、それに見覚えのある姿をしている少女を見て、俺はふと、ある事を思い出す。
とあるゲームの周回に、さらなる革命をもたらした我らプレイヤー側から人権と称される術師。俺も長らくそのゲームにてお世話になったと思う。ここがあの世界なのだという事を本格的に知る前だったからこそ、彼女を見て思わず俺は呟いてしまったんだ。
――ああ、キャストリアじゃん。って
俺の呟きがどうやら少女には聞こえていたのか、少女――否，キャストリア（仮）は翡翠色の双眸を濁し、
「わたし、そんな名前だった、のかな……？
でも丁度良かった。私も名前を忘れていたところだったので。キャストリア、キャストリアかぁ……」
と、俺が言ったあだ名のような何かを、なんの疑いもなく自分の名

前として受け入れたのだ。
それが私の名前だと信じるように噛み締めて。
名を、忘れる。その言葉を聞いた時、とある考えが俺の脳裏を過る。
もしかすると、俺も名前を失っているんじゃないか？という考えだ。でもその考えは一瞬にして消え去った。つまるところ杞憂だったのだ。
俺は俺自身の名前を明確に、はっきりと思い出せた。そして心の内で、俺は〇〇なのだと自分に言い聞かせるように刻み込む。忘れないように、無くさないように。しっかりと。
胸の前で拳を握る俺を見ながらキャストリアは。
「でも私の名を知ってるって事は、あなたと私は仲間だったんですね！……よかったぁ！」
子供のようにはしゃいで喜ぶ彼女は続けて、
「おはようございます――ライサンダーさん。
ここが何処だか、わかりますか？」
ライサンダー。
それは一体誰のことを示しているのだろう、と俺は部屋の周りを見渡すのだが、この部屋には俺と彼女以外には誰もいない。
よって彼女が言うライサンダーさん、とはもしかしなくても俺なのでは、なんて考えが浮かんだ。
だから俺は、それ人違いでは？と彼女に聞いてみたんだ。
「え……ライサンダーさん、じゃない？
で、でも名札が、ついてるし――」
「あ、そうそう。わたしたち『名無しの森』で倒れていたそうですよ、ご存知ですか『名無しの森』？」
『名無しの森』
生きてきた中で一度も聞いたことのない森の名前。
はて、そんな森の名前聞いたことあったかなぁ、と昔の記憶を探るのだが、やはり無い。
俺が頭の上にはてなを浮かべていると、彼女は優しく『名無しの森』についてを教えてくれた。

曰く、入ったが最後霧に迷って出れなくなる。
曰く、迷う内に物覚えができなくなり最後には自分の名前と、その過去を無くしてしまう。
曰く、帰らずの森。このブリテンでも最悪の妖精領。
それらを聞いて俺はこう思うわけだ。
まるでネットにある都市伝説みたいだな、と。
この世の何処かにある異界だとかそんなものの類に近い何かを俺は名無しの森とやらに感じた。
怖いなぁ、近づかないようにしないとなぁって。
「ら、ライサンダーさん？
どうしたんですか、目が逝っちゃってますよ!?」
――あ、俺ライサンダーって名前じゃなくて、○○って名前なんだ。
「そ、そうなんですか!?で、ではこのライサンダーって名札は一体……」
――なんでこんな名札がついてるのかキミにも分かんないよね。
うん、俺にも分かんない。
「それでいいのかなぁ……？」
――……うん、いいと思うよ。
俺と少女の何気ない会話は、一人の青年がこの部屋に訪れる事によって終わりを告げた。
「私も、そう思います」
ポロローンとハープの音が聞こえた気がした。
誰だ!?と俺はベットに座りながら、声が聞こえた方を見てみれば、そこには一人の青年がいた。
林檎の皮のように艶やかな赤く長い髪に、主君に使える騎士を彷彿とさせる白をベースにした西洋の鎧。
その手には楽器のハープに似た弓を持っている。
これまたどこか見覚えのある、
――否。どこからどう見ても、トリスタンじゃん。
そう、心の中で呟いた。
今度は口にすることなく。

まさか、自分がやっていたあるゲーム作品に出てくるキャラが目の前にいる、なんて事はない。
多分、そういった類のそっくりさんか何かだと思う。もしくはコスプレイヤーとか。
後キャストリアの時は間違えて口にしてしまって、なんやら危ない気がしたので例え似ていたとしても、例えコスプレだとしても、見知らぬ人に対してその名を言うまいと心に決めた。
「違うのですね、貴方は……
私は、何一つ思い出せないでいる」
トリスタン似の赤髪の青年は表情一つ変えずにそう言った。
因みにだが今この部屋には自身の名を忘れた人が二人いる。目の前にいる少女と青年の二人だ。
目の前にいる二人は俺とは違い、元は知り合いなのだろうかとちょっとだけ考えた。
だが二人とも名前を覚えていないという事を聞いて『名無しの森』の話を思い出し、過去の記憶も失ったんだと気がついた。
元は知り合いだったかもしれないし、そうじゃなかったかもしれない。
「覚えていることといえば、私は彼の従者だと言うくらいでしょうか……」
青年は俺の方を向いてそう言う。
至って平凡極まりない俺に従者なんて居るはずがない。それにこんなゲーム内のキャラにそっくりな知り合いは俺にはいない。
『『この命に替えても主を守る』……
その思いだけが、今も私を奮い立たせている……」
前世の俺は一体どれだけの徳を積んだのだろう。
こんな赤髪イケメンの糸目青年にここまで言わせてるって相当なものだ。
でも俺は、彼が俺の従者たという事に驚きを隠せずにいる。正直驚きしかない。
「無理をなさらずに我が主。私のことはどうぞイゾルデダイスキ――

間違えました。そう、トリストラム、私の名前はトリストラムに相違いなく……」
青年は胸に付いた葉の名札を見せてドヤる。
葉の名札には古英語とやらでそう書かれているらしいが、俺には全くといって読めません。
トリストラムって実はすごかったり……？
「はい。なので貴方はライサ……いえ〇〇でしたね。私はトリストラム。彼女はキャストリア……ですね」
俺は青年の言葉に同意し、よろしくと告げトリストラムと握手を交わした。
「つまるところトリストラムさんは自分が何者であるかなどを思い出せないがやらなくてはいけない目的があって危険を承知で『名無しの森』に入ったと……」
「また、〇〇さんはここに至るまでの記憶はないが名前やある程度の記憶はあるんですね」
おかしいなー、とキャストリアは首を傾げて悩む。
キャストリア曰く名無しの森にて俺とキャストリア、それにトリストラムは倒れていたという。
そして、もう一度キャストリアは名無しの森の特性を一から振り返る。
キャストリアの説明でなんとなく理解はした『名無しの森』について。その特性として森に入ったならば最期、持っていた名前と過去の記憶を失う。
確かにおかしい事だよな。
仮に森に入ったならば、俺は彼らと同じように名前と記憶を失っていてもおかしくはない。
なのになぜ持っているのかって話だ。
考えても仕方ない。この話はまた今度にしよう、と俺はキャストリアとトリストラムの二人に話した後、話題を俺の話から二人の話にすり替えた。
結局分かったことはそんなにない。

トリストラムは詩人、もしくは超絶技巧の弓使いだった、かもしれないということ。
キャストリアは名前と一緒に色々と落としてきてしまったらしい。つまるところ二人とも何も分からないって事だな。
こういう記憶喪失系の奴って思い出した時がいちばん大変になることが多い。
思い出した途端、世界を滅ぼす――だとか人間を排除する――だとかゲーム系だとそうなっている事が多々ある。実際そういうゲームを昔やっていて、何度か度肝を抜かれた事があった。
二人の記憶が蘇ったとして、世界を滅ぼすだとか人間を排除するだとかそういう風にならなければいいのだが……
と、手頃なところに手を置くのだが何故か触り心地が良いのでそれを撫でて荒ぶる心を落ち着かせようとした。
サラサラな髪だ……な。……ん？
「あ――あ、あの」
俺、キャストリア、トリストラムの三人は同時に固まった。
「○○さん!?何してるんですか」
――いや手頃なところにこの子の頭があったから、つい、ね？……
「手頃なところにあったからって、見知らぬ子の頭を撫でませんよ……」
――えぇ……
「えぇ……じゃありませんよ……」
ごめんね、と俺は深い水色の髪を持つ女の子の頭から手を離した。
「――あ、もう少し、撫でても……」
少女は頭を撫でていたこの手を惜しむように言った。
俺はその少女の全身を見て驚いた。
頭のてっぺんにはアホ毛が生えており、水色の髪に隠れたエルフのように尖った耳。その背中には普通、人には生える筈のない――蝶の薄く綺麗な翅が生えていた。だがその翅は傷だらけで、切られた跡が至る所に残っている。
翅を模した黒のアクセサリーから伸びる灰色に汚れた白い羽衣に、

肩を出すタイプの白いワンピースを着ている。
遺伝子のように連なるように重なる黒の模様を持つフィンガーレスタイプのグローブを着けている。可愛いなって若干思ってしまった。
俺がいるのは現実なのだろうかと、ものの数秒軽く現実逃避しかけた。
気がつけばそこは見知らぬ部屋で、名前も記憶も失った少女と青年と出会った後に、実はファンタジーが入った世界でしたなんて笑えないのだが……
「その……みんなが、あなたたちを呼んでこいって。もうすぐ夜になるから……」
翅の生えた少女は申し訳なさそうに言う。
少女の黄土色の瞳を覗くと軽く淀んでいた。
「(……○○。彼女とは知り合いで？)」
――知り合いでは、ないです。あんなファンタジー全開な知り合いはいません……！
トリストラムは少女と知り合いなのかどうか気になったのか、少女には聞こえないよう小声で俺に質問してきた。まあ当然っちゃ当然だが翅が生えた少女とは知り合いではないため、ＮＯと即答する。
「(彼女から敵意は感じません。
善良な人間……いえ、あれはどう見ても)」
――コスプレ？
「(こすぷれ、ではなく……妖精かと)」
――……妖精っているんだ。か、架空の存在だと思ってた……
「……あ。あ、あ、あの。もも、もしかして、動けませんか？――うう、でもそれだと、私がみんなに……また、また役に立たないって、叱られちゃう……」
妖精の少女の尖った耳がしょぼくれるように落ち、開いていた黄土色の瞳は段々と薄目になっていく。この子は、見るからに自信が無いのかもしれない。いや、自信がないというよりも――
「大丈夫ですよ。ちょっとだけ話をして参りますので先に行っていて

ください。他の方にはあなたに呼ばれたと説明いたしますので」
キャストリアが咄嗟に機転を利かせ、妖精の少女が叱られないように立ちまわってくれた。
ナイス！とキャストリアに向かって小さくサムズアップするが、気がついていない。悲しい。
その横では妖精の少女は役に立てたと喜び、お待ちしてますと言い残し、大急ぎで広場とやらに向かって行った。可愛らしいなぁと後ろ姿を見送ったが、よく背中を見ると本当に翅が生えているのだ。
ここで初めて妖精っているんだと理解した。
とりあえず広場というところに向かってみようかと思い、二人に話す。
キャストリアはどこか引っかかる言葉を幾つか口にしたが、俺は気にする事なく二人の手を引っ張って妖精の少女の跡を追うように向かった。

▽

広場に着いたはいいが、そこはあまりにも現実離れした――つまるところそこだけ住む世界が違うように感じた。
まるで俺たち三人が童話の世界に紛れ込んだとでも言うべき現状に、またもや現実逃避しかけそうになった。
広場にはエルフやドワーフ、獣人といった面々が沢山いた。それはまさに異世界。
ファンタジーの世界だ。
――ありえない。
今すぐにでも言いそうになるが、すぐ様口を両の手で押さえ声をあげないようにする。
エルフらしき者が俺ら三人に話しかけてきた。
氏族、名前、どこの街出身かを尋ねるように。
名前はいいとして、氏族と街出身とは何なのかわからない俺とトリストラムを放置し、話が始まった。

「わたしたち、自分の名前しかわからないのです」
俺は名前も記憶もあるぞ、と言いそうになったが、キャストリアは自身の唇に人差し指を当てにっこりと微笑むことで俺は理解した。
それは俺たち三人以外には悟られてはいけないのだと理解した。と思ったが、どうやら口が動かない。
なんでだろうと不思議に思いながらも、俺はキャストリアを見つめ、エルフの者との会話を任せる事にした。
「どこから来たのか、どうしてここに来たのか、何が目的だったのかも、何も……」
キャストリアがそれを告げた後、この広場を不穏な空気が支配したがそれは束の間だった。
獣人っぽい者がヒャッハー！とばかしに騒ぎ立てた瞬間、他のエルフやドワーフといった者達が一斉に大はしゃぎ。
――なんだこれ。
思わず、こう呟いてしまった。
なんだこの世紀末っぷりの騒ぎようは。
祭りだ、祭りだ、と喜び踊る者や、俺ら三人を名前だけの落ちこぼれと呼んで跳び上がる者。
後者のヤローはぶっとばす。
「『おしまいの村』コーンウォールにようこそ！――ご同輩！」
ご同輩という言葉が何を指し示しているのかはさっぱりだが、このファンタジーの者共からは悪意や敵意といったものが感じられない。むしろ善意や喜び、同情といったものをこの広場の者達からは感じられた。不思議な者たちだ。
「――はい？」
その時見えたキャストリアの気の抜けた顔は、なかなかに可愛らしいものだったということを後で記しておこう。スマホがあれば撮りたかった、以上。

▽

――もう、食べられないヨ……

その日の夜に行われたお祭りは実に騒がしい者だった。大きな焚き火の前で肩を並べて踊る者たちや、飯を食らう者など沢山だったが、多くの者は俺たち三人の周りで一緒に楽しく会話をしてくれた。

その中には面白い話を聞かせてくれる者や、興味が湧く話を聞かせてくれる者もいた。

相槌を打ちながら葉の皿に盛りに盛られたご飯の山を食しつつ大いに楽しませてもらった。

「〇〇さんはとても会話上手で驚きました。

『風の氏族』や『土の氏族』とも分け隔てなく話をして。どちらかに肩入れするのが妖精國の常識なのに……」

ただ単に向こうからワラワラと会話をふっかけてくれるからそれに相槌を打ちつつ、話を聞いてるように立ち回っているだけなんだがな。

他には、気になった話があればそれを聞いてみたり――

「妖精國とは？」

「え？それも忘れてしまったんですか？」

キャストリアが妖精國とやらの説明をしようとしたところで祭りの終了の合図がなった。

みんなはスタコラサッサと片付けをしそれぞれの家に帰っていった。

――……終わった、のか？

妖精の少女にまたあの部屋――間違えた家に案内され、ここが今日から俺たちが住む場所なのだと説明してもらった。

「で、では、おやすみなさい」

ペコリと一礼して帰っていく妖精の少女。

待ってと言おうとしたが、それも虚しく残ったのは俺たち三人だけだった。

あの子の名前を聞きそびれた気がした。

その後はさっきの話の続きをキャストリアがしてくれた。

妖精國ブリテンについて。

妖精の氏族について。
いろいろ教えてくれたのだが、一つ触れてはいけない氏族の話を振ってしまった時キャストリアは。
「――――――！」
怒り狂うラージャンのようだったと言っておこう。
まあ、あの怒りはすぐに収まったのだが。
偏見が過ぎました、今のは忘れてくださいと言ったキャストリアの目が死んでいたため、俺はさっさと忘れようと心に誓う。
トリストラムの方をふと見てみると、あの祭りの時からずっと終始顔が強張っていたのだとわかる。
キャストリアがそれを指摘すると、トリストラムは理由を話してくれた。
妖精であるだけで恐ろしいのだと。
俺らを除く、あの場にいた者全て神秘を持ち合わせていて、無害ではあるがその力は人間を遥かに凌駕していると。
最後にその気になれば彼らは俺たちを容易く殺害できるのだと言って終わった。
この話を聞いて俺は背筋に冷たいものが走った気がした。
消灯時間が来たとキャストリアが言って話はまた明日にという事になった。

二話

――お、おはようございます、みなさん。
妖精の少女の優しい鈴の音のような声で俺は目を覚ました。
寝ぼけ眼で妖精の少女の頭に手を伸ばして、数十秒ばかり頭を撫でてしまった。
あうあうと言いながら雪のように白い頬を赤く染める妖精の少女。
――お、おはよう……えっと……？
「きき、今日は、む、村の案内を任されました」
ぐでっと木の葉の布団が敷かれたベットの上で寝ているキャストリアを起こしたトリストラムと、眠い目を擦るキャストリアと、ついさっき起きたばかりの俺を含めた三人は、早速妖精の少女に村の案内をしてもらう事にした。
「ここコーンウォールは昔にあった街を再利用したもの、だそうです。二百年前、コーンウォールの領主だった妖精が妖精騎士に倒された後、領主の呪いで、森に入った者の記憶を失わせる霧が立ちこめるようになって、この村は、ほ、放棄されたんです」
妖精の少女はどこか諦めの入った表情でここコーンウォールについてを説明してくれた。
ここはブリテンで一番の危険地帯だから、誰もこの場所には追っては来ないだとか。役割、価値、友人、目的、それらが終わり低くなり居なくなり、そして失ったそんなもの達が流れてできた集まりが此処なんだとかそういう類の話だった。
競い合うより助け合う、それらが好きな妖精たちではこのブリテンでは生きてはいけない。死んだ方が楽だからと、この森に来たと。
キャストリアはそれらを聞いて目を見開かせていた。
正直俺は話半分で聞いているから、全然話が頭に入ってこない。
妖精の少女の説明途中、横を通りすがっていく者たちが次々と俺に声をかけてくれた。
メシを旨そうに食べるだとか、声には命があるだとか、今日は詩を歌うだとか、服が破れたら修理してやるだとか、それら全てに対応し

返事を返す。
　ここにいる者たちは皆優しい者たちばかりで、何故か気分良く返事を返せる。なんでこんなに人に優しくできるのか逆に不思議でならない。
「なんだろう、この待遇の差は――私もほぼ同じ境遇なのに……はは……」
　目が、死んでいる。
　薄い翡翠色と濃い翡翠色が混ざり合って濁るモノだから、見ている側からすればかなり怖い。
　――目が逝ってるよ、キャストリア
「昨日〇〇に言った言葉が、今日のわたしに帰ってきた気分ですよ……」
　――まあまあ、そう言わずにさ。キャストリアは側いるだけで面――じゃなかった、楽しいから気にする事ないって。
「今、面白いって言いませんでした？」
　――……いって、ないです。
「こ、こら――！目を逸らさずにわたしの目を見ていってみろぉ！」
　捕まるものかと逃げる俺を、ぷんすかと怒りながら追いかけるキャストリア。さながら悪戯をした小鼠にキレて追いかけ回す猫ならぬ金色の獅子のようだ。
「ふふ、二人を見ていると、平和なあの頃を思い出して、懐かしい気持ちになってきます」
　妖精の少女は目の前の光景を懐かしそうに見つめ、くすりと笑う。
「待て――！〇〇」
　――待てと言われて待つ奴はいな……あっ
　ぐるぐると妖精の少女の周りを回っていたせいかは知らないが、逃げる脚が滑り、見事顔面が雑草の生えた地面へ吸い付いた。
　い、痛い……
「あ、あはは！」
　――……さいあくだぁ

▽

「以上が村の領域（なわばり）についてです。他に聞きたいことはありますか？」
後ろで俺の手を掴んで締め上げながら、キャストリアは自身が疑問に感じていたものの幾つかを妖精の少女に投げかけた。それに対し妖精の少女は途切れ途切れだが的確に疑問を明かしていく。
「そうでしたか……森から出るには何か機転が必要みたいだなぁ……」
「キャストリアさんは森を出たいんですか？」
「いえ？ぜんぜん？なんとなく聞いただけですよ」
「〇〇もそうですよね？だって、自分から『名無しの森』に来たんですから」
そんな急に俺に話を振られても、答えようがない。
名無しの森に来た時の記憶は既に消えているのだから。目的も、理由も。
分からずに今ここにいる。
そもそもな話寝て起きたら、ゲームのキャラにそっくりもしくはコスプレをした人と遭遇して、ファンタジー丸出しの異世界に居たんだから。
なんとも言えない状況にまだ自分も整理がついていない。
俺が今キャストリアに言えるとしたらこれだけだ。
――まだ、何も分からないんだ……
下唇を噛みしめ、両の手を深く強く握った。指先の少し伸びた爪が掌に当たる。力強く握っているせいか余計に爪が掌に食い込んで来て地味に痛いので、さっさと握りしめるのをやめた。
「何か必要なモノができたら言ってください。わたしにできるコトなんて道案内くらいですが、みんなに叱られない範囲なら、みなさんの力になりますので」
妖精の少女は柔らかそうなその頬を緩ませ微笑む。
そして俺たちにペコリと一礼した後、この場を去っていった。
「さて、村の地形も把握しましたね。ついてくる妖精もいない……な

らばやることは一つですよね○○！」
――はい……？
この時、俺は後悔した。
キャストリアに手を引かれるまま森の中に入ったことを。
腕試しと称し、この異世界に来て初めての戦闘をすることになるなんて誰が知るものか。

まあ、結果は酷いものだった。
戦いとは無縁の日本で平和に暮らしてきたのだ、碌に戦闘なんてできるはずもない。だから俺は魔物擬きから必死に逃げた、それはもう死ぬ気で。
キャストリアの支援のおかげかいつもより早くかつ長く逃げていた気がしたが、多分気のせいだと思う。俺を追う魔物擬きはトリストラムの持つ弓から放たれた弓矢のような何かによって一撃で倒された。あれを見た時、トリストラムが言っていたことは本当だったんだなって確信した。
また、キャストリアは後方支援の魔法使いみたいな役職かなって思っていたら割と前線に出て不思議な形状の杖を使って魔物を物理で殴っていた。
物理攻撃も難なくこなせる魔法使い、それがキャストリア。見てて、最近の役職としての魔法使いはかなりハイブリッドなんだなって思う。
腕試しと称した戦闘を終えた瞬間、キャストリアは地面にぶつけるんじゃないかと思わせるほど頭を深く下げ、俺に謝ってきた。
「ご、ごめんなさあい!!」
キャストリアの顔を覗くように見てみると、その翡翠色の双眸は、ぐるぐると渦を巻いていた。
顔面はまさに茹で上がった蛸だ。頭からは湯気が出ているようにも見える。
ついには頭を抱え始め、ぶつぶつと呪文のような何かを捲し立てるように唱えていた。

すみませんすみません礼儀知らずですすみません。と、その様がまるで電池が切れかけ、残った電気で起動するが起動音の途中で電源がなくなり、また起動するというループを繰り返すおもちゃみたいでなんか面白かった。でもそれを言うと殺されそうな気がする。

今のキャストリアにかける言葉は多分これだ。

――それを言ったら俺だって戦闘を二人に任せっきりにして逃げてたんだ。許すも何も始めからそんなんないに決まってる。

「で、でで、でも！そう言われたらわたしだって」

――ああ言われたら、俺だって！

「わたしだって！」

――俺だって！

「わたし！」

――俺！

「わたし！」

――どうぞどうぞ

「わた――え……？え、えええ!?」

「フッ――お二人は大変仲がよろしいようで私は安心しました。それに〇〇、貴方はそれでいいのだと先程の戦闘から分かりました」

俺とキャストリアの漫才のような何かを見て、微笑ましく思ったのだろうか。トリストラムは保護者のような目つきで俺たちを眺めていた。

――それでいい？それは一体どういう……？

「何と言いましょう。そうですね、指揮官としての頼もしさとでもいうべきか……貴方がいれば最終的には何とかなっている、そんな確信すらするのです」

――イゾルデダイスキー……

「フッ――トリストラムですよ〇〇」

「――」

▽

――もう、食べられないヨ……
この森に来て二日目。今日も焚き火をみんなで囲み祭りのような宴をあげる。
ご飯はたらふく、お腹がいっぱいになる程食べれて、後で知ったが――妖精のみんなとたわいのない会話をする。何でもないよくある会話だ。
それでも俺にとっては何より楽しかった。
そんな俺を、ここに来て信じがたい現実が襲った。
とある妖精の一言で俺はあの世界に来てしまったのだとようやく理解した。
「おまえさんの、その右手……変わっているが、それは令呪だろう？三角もつけられちまって……クソ」
令呪（れいじゅ）。とある物語において、それはサーヴァントと呼ばれる英霊たちと契約したマスターであることを証明するモノでもあり、三回限定の切り札とされ、使役するサーヴァントに対し絶対的な命令権を下すことが可能になる。
――それが令呪。
側から見たそれは完全に刺青。
命令権を行使することで浮かんでいた令呪は徐々に消えていく。逆に使わなければ消えることはない。
今も俺の右手の甲に刻まれている赤い盾を思わせる紋章、それもおそらく令呪なのだろう。
――は、はは……
乾いた笑いしか出なかった。
「〇〇……？」
「しかし令呪か……令呪……あと少しで思い出せそうなのですが……ああ、私はもどかしい……」
こうして俺は信じがたい現実にいるという事を知った。
どこ系列の作品なのかは知らない。
だが確実に分かることは一つ。俺がいる世界は少なくともいずれ

かの作品に属しているＦａｔｅ／の世界だという事のみ。
俺の右手の甲に刻まれた、盾を彷彿とさせる紋章を持つこの赤い令呪が、それを示している。
赤い盾模様の令呪、どっかで見た覚えがあるような気がするのだが、はて一体どこで見たのやら。
絶対にこの模様を俺は見ていた筈なのに、なぜ思い出せないのだろう……
嫌な気分になりつつある中、部屋の周りを見ると、俺以外の二人は既に寝ていた。
キャストリアは木の葉の布団に包まり、小さな寝息をたてて眠っている。
トリストラムは弓に抱くようにして床に座り眠っている。
もう、二人は寝てしまったのか。早いな。
いや、二人が早いんじゃなくて、俺がまだ寝付けていないだけなのだ。あの時からずっとこの令呪について考えていたから、今も眠れないのだろう。
明日もきっと朝は早い。ならさっさと寝て朝に備えるのが一番なのだが……
――この俺の手の甲に宿る令呪について、今、考えても仕方ないかぁ……
はぁ、とため息を吐き床に敷かれた木の葉の布団を下に眠ることにした。今日はもう考えるのはやめだ。これ以上考えても何か進展があるわけでもないのだ、ならばと今日はすぐに寝て、明日また考えることにした。
「――」

▽

「おはようございます、○○」
トリストラムの聞いているとなんだか落ち着くその声を聞き、今日は目が覚めた。

俺の名前を呼ぶときに、何か違和感があるのか何度か俺の名を言っていた以外は、なんともなさそうだった。
さあ今日も一日頑張るか、と両腕を天高く上げ、背筋を伸ばした、刹那――広場から誰かを怒鳴る声がこの部屋まで響いてきた。
何事だろうと俺とトリストラム。
そして急いでいたせいなのかは知らぬが、いつも頭に被っている灰色の帽子をつけ忘れたキャストリア。俺たち三人は急いで広場へ向かった。

そこでは獣人――だと思っていたが実際は獣型の妖精が、妖精の少女を罵っていた。
目の前の光景を見せられ、それでも動かないやつは相当のヤロウだ。だから俺は妖精の少女を庇いに行こうとしたのだが、キャストリアに腕を掴まれ動くことができずにいた。
何でだ、そう聞くと。彼女は言う。
「……ダメ、です。今はまだ私たちは部外者なのだから、もう少しだけ様子を見てからに――それに私たちの今の立場はよくないもの。もし何らかのトラブルが起きた場合、私たちには逃げ場はありません。だから――」
確かにキャストリアの言うことは正しいと俺も思う。何らかのトラブルを対処する力を二人は持ち合わせているかもしれないが、肝心の俺は――持ち合わせていない。
妖精の少女をもし庇った場合。
もしかしたらその危惧していたトラブルが起こる、かもしれない。それを偽善と言われてもおかしくはないし、自己満足だって罵られてもおかしくはない。
たかが半日の付き合いでなぜそこまでするのか。
別にやらなくてもいい、俺以外のこの場にいる誰かがそれをする筈と、知らない声が聞こえてくる。
でも俺はそれが一番嫌いだ。
ふざけんな。この場にいる誰かがそれをするわけがない。誰もし

ない。誰も庇うはずがない。
……だから。
だからこそ。

――俺がやるんだ。
キャストリアの静止を振り切って、騒ぎの中心へすぐさま向かおうとした。
だがその頃には――もう少女は何処かへ行ってしまっていた。
遅かった。
庇う暇も無かった。
少女はどんな思いでここを去ったのだろう。
不思議とそれが気になったが、ここにはもうその少女はいない。少し虚しい思いで、広場の中心に一人立ち尽くす。
よう、と妖精の少女を罵っていた獣人型の妖精に声をかけられた、このタイミングを見計らって俺は言った。
――……なあ、さっきの妖精の子は？
頭が真っ白になっていても不思議と声は出るものなんだなって、今はそう思う。
「ん？アイツのことか？おい、
――アイツの名前なんだったっけ？」
話の内容は詳しくは覚えていないが、少なくとも少女を散々怒鳴っていたのにも関わらず。誰一人として妖精の少女の名前を覚えていない、というこの不気味な状況に、血の気が引いた気がした。
「……名なし……彼女に名はないと？だから今の仕打ちをしたのですか？」
いつもと違う、トリストラムの声を初めて聞いた。
それは今朝聞いたあの凛とした落ち着きのある声ではない。その声色は鋭く洗練された剣のように――冷たい。
まるで首元に剣が突き立てられているんじゃないかと、錯覚しそうになる程に。
「名無しの妖精に価値はないだろ？だって、

――もういなくていいヤツなんだから」
この妖精達の言動に、俺は怖くなってきていた。
彼らを直視しづらくなり、俺は後ろにいるキャストリアを見つめた。
彼女は怒っているのだろうか？
僅かだが気難しい表情を浮かべており、何か言いたげそうになりながらも、今はただ無言を貫くだけだった。
妖精達が運動場へ行くと言って去った後、この隙に俺たち三人は集まり、この後をどうするかを話し合う事にした。
「……どうしますか、〇〇？」
――少なくとも、俺はあの運動場へ行くことはない、と思う。それよりも気になることがあるんだ。キャストリアは分かる？名なしの妖精って
「――はい。その名の通り、名前を無くした妖精、です」
キャストリアはこほんと咳払いをした後、名なしの妖精についてを語ってくれた。
俺たちは『名無しの森』で記憶と同時に名前を失ってしまったが、妖精は自分で名前を失うらしい。
俺を指差し「〇〇の場合は例外ですよ？」と忘れずに後で付け加えていた。
妖精は基本不老で、人間や動物のように寿命はないという事を知った。
「ですが、生まれた時、胸に抱いた目的――”自分が夢中になれるもの”……それを失った妖精は名を失い、次第には衰弱していき、最後には息絶えます」
――多分ですが、彼女もその類でしょう。名前を失ったからずいぶんと経つようですが。
目的を失えば、妖精は名を失い、死ぬ。
この世界ではそれは当たり前のことなのだろう。
たとえそれがどんなに残酷な死に方だとしても。
ここでは日常的に起こる事なのだと。キャストリアの淡々とした

言い方から、何となくだがわかった気がした。
人は――不老ではないとはいえ、目的を失ったところで自分がもらった名を余程のことがない限り死ぬまで失うことはない。
だが妖精は違う。目的を失うと言うことは名を失う事と同意義であり、失えば自分が誰かもわからず目的も無く衰弱していき、最後は死あるのみ。
人の身であり、記憶を失うという経験が無い俺からすれば、それは多分到底分かる事のない恐ろしいモノ。
だとしても、あの少女を助けてあげる事は出来ないのだろうか。
「また、名前を失った妖精は、他の妖精に嫌われます。……村の中に入れているだけここの妖精は寛大だとわたしは思います」
なら――
俺が言おうとした事を先に予想していたのか首を横に振った後、キャストリアは言う。
「わたしたちにできる事は、彼女の住処を見に行き、危険がないかどうかを確かめる事。危険があればそれを取り除く努力をする。村の中には招けませんが、その住処を村と同じように安全にする事はできます」
ものの数分程度でここまで考えられるキャストリアにかなり驚いた。どこか抜けていて可愛らしい子だと思っていたが、こんな一面もあるのだと知った。
――そっか……そう、だな。うん、ありがとうキャストリア！
思わず、キャストリアの手を握って、そのまま感謝を述べてしまったが、気にしない気にしない。
「――」
この時。
キャストリアは、顔を真っ赤に染め、宇宙を眺める猫のような表情を浮かべていた、とだけ言っておこう。

三話

早速、キャストリアの提案通り、村の外れにある妖精の少女の家をあの村と同じように安全にするべく向かった。

向かった先に丁度、その少女がいた。偶然とでもいうべきが最悪とでもいうべきか、村の外れにいた妖精の少女が文字通り獣畜生共に襲われていた。絵面が結構酷い。

ああ、助けなきゃと獣共に向かおうとしたところ、トリストラムに首根っこを猫のように掴まれた。

どうやら俺は前線に立って戦うよりも、後方で二人の指揮官的なポジションでいて欲しいのだと言われてしまった。

仕方なく指揮官ポジションに収まったはいいものの、指揮の仕方とかこれといって全く分からない。

だが、何故か知らないが身体は自然と覚えていた。

的確とまではいかないが、二人のサポートを少なからず出来ていたと思う。この着ている服が持つ能力の使い方だとかそういった類のものを、ある程度は扱えていた気がする。

何処かでこの服を見た覚えが……いや、考えるのはよそう。

キャストリアとトリストラムの二人は先程の戦闘について互いに話し合っていた。

元は軍属だとか猟師ではないか、という予想を立てた後、キャストリアは支えられていた王様は鼻が高いと大いにトリストラムを褒めていた。

直後、何ともいえない顔でトリストラムの弓を見つめていたような……？

そんな事よりも妖精の少女の無事を確認しなきゃ。と思った時には俺の身体は勝手に動いていた。

――大丈夫だった？

「……も、もしかして。いまのは、私のため……？」

目を丸くさせ、何があったのかわからないといった様子の妖精の少女。

「はい。○○が今すぐにでも！って言うもので、あなたの様子を見にきたのです。――獣達に襲われていたようでしたが、怪我はありませんか？」
「は、はい。いつものコトなので……そ、それで何の御用で、しょうか？村の案内は、もう終わってしまいましたし……」
少女に言われてようやく気がついた。
この後のことを全くといって考えていないという事に。どうしようかと、表情が固まる俺に助け舟を出してくれたのはキャストリアだった。
「わたしたちは、昨日あなたに親切にしていただいたお礼として、せめて、あなたの住処の獣除けをしてあげたくて……」
「――えへ。えへへ……嬉しいなあ嬉しいなあ……わたし、お役に立てていたんですね。久しぶりだなぁ、嬉しいなぁ」
妖精の少女は誰かの役に立てるという事に喜びを感じるのだろうか。もの凄い社会奉仕精神をお持ちでいらっしゃる様子。
だがそれは、名前と記憶がないからなのだろうなって思ったらなんだか悲しい気持ちになった。
「そうだ、お礼に幸福の祝福を――……あ……どう使うか忘れちゃったんだ。ごめんなさい、屋根もなくて……返せるもの、何もないの……」
これを聞いた時、目から涙が出そうになった。
――実は、もう、もらってるんだ、お礼。だから、いいんだよ……
「そう、なんですか？なんだろう……朝に積んだお花をあげたのかな……？」
妖精の少女は分からないといった表情を浮かべていた。俺は今すぐにでもここから立ち去って、一人部屋に篭って泣きたくなった。
でもそういうわけにはいかないことは分かっている。
この後、一人で獣除けの結界を張るから俺たち二人は村に戻っていてくださいと、キャストリアに言われたが、それなら尚更守らないといけないのでは？と言おうとしたら、またもや先読みしていたのかこの程度なら一人で大丈夫と小さな胸を張ってドヤ顔を浮かべていた。

可愛い。
昨日も見て知っていたが、物理攻撃もこなせる役職魔法使いのキャストリアなら大丈夫。という謎の信頼を感じ始めていた俺は、不安そうなトリストラムを引き連れて村に戻る事にした。
それでよかったのかは分からないのだが――

▽

――昨日と比べれば、よく眠れた気がする。
いつものように、木の葉でできた布団の上で目が覚めた。やはり寝起きは身体が痛くなる。木の葉の布団があるからとはいえ、下は木の板でできた床だからだろうか。それでも何故かこの身体はなんなく眠れるのだから、不思議だ。
「ふわぁ……おはようございます――……昨夜は宴がなかった分、早く眠れましたね。それはそれとして、今日はどうしますか？特に用事がなければ、私はまた村の外に行きますが」
どうやらキャストリアも俺と同じく今さっき起きたみたいで、可愛らしい欠伸をした。
だがそれを俺に見られたことに気がついたのか、顔を真っ赤にさせつつも、何事もなかったかのように朝の挨拶をし、今日の予定を聞いてきた。
俺は特に考えてないと言おうとしたタイミングで、ぐうっと腹の虫が鳴った。
そういえばと、昨日の夜はご飯を食べていなかったことを思い出す。
――お腹、空いたな……
「お腹が……なんです？」

▽

ふらふらとした足取りで広場へと向かい、朝ご飯が用意されて無い

かどうかを確認しに行った。
一人の妖精に挨拶を交わし、何か食べるものはないかを尋ねてみた。
それを聞いた妖精の様子が徐々に可笑しくなりつつある事に何故気が付かなかったのだろうかと、俺はのちに後悔することになる。
――人間だ。
誰が言ったか分からない。だがその言葉に反応した村中の妖精達が一斉にこの広場へと集まりだす。
時既に遅く、不穏な空気が漂い始めた頃には、俺という一人の人間は数多くいる村の妖精達に囲まれてしまっていた。
人間というだけで何故それほどまでに興奮し、喜ぶのだろうか。俺にはそれが一番理解し難かった。
背筋が凍るような熱い視線を感じ、思わず寒気がしたので両腕を組んで肘をさする。
今朝までは何事もなかったはずなのに、どうしてこうなったのだろうという考えがしばらく俺の脳内を巡る。
「○○！空腹だなんて口にしたらダメ――……って、もうバレてるぅーー!?」
あわわ、と焦りの表情を浮かべるキャストリアだったが、この反応を見た彼らに俺と同じ人間では？と思われたようで、キャストリアやついでとばかりに部屋にいたトリストラムも妖精達に囲まれた。
そして、気づけば村の中心にあるテントへとドナドナされてしまった。
「訳の分からないままテントに押し込められ、早半日が経ちましたが……」
――うん。ご馳走が一時間ごとに運ばれてくるんだよね……もう食べられない……
今も俺の目の前には、宴の時よりも盛りに盛られた料理の山が存在している。しかも一時間ごとに増える仕様。
なんだろう、この感じは。
まるで食べきれないのにまだ餌を与え続けられる雛の気分になり

そうだ。いや本当に、もうこれ、やめてもらっていいですか？
「これはもう歓迎という名の監禁ですね。
キャストリア、貴方にはどうしてこうなったのか分かりますか？」
トリストラムの言葉に思い当たる事があったのかキャストリアは苦笑いをしつつも答えていく。
「……それは、〇〇が人間だからだと――以前から美味しそうに食べる方だなって思ってはいましたが……早いとこ気がつくべきでした。あはは、わたし、あまり人間を見た事がないものでして……」
なんだかキャストリアの頬から冷や汗が出てきているように思える。
「と、それよりも今の状況ですね」
ここでキャストリア先生の説明が始まった。
何が何だかよく分からない俺に対しての助け舟である、彼女の説明。もといキャストリア先生の講座。
どうやらキャストリアによれば、今後俺に対するおもてなしはさらにヒートアップする事になると言う。今より酷くなるという事を聞いて、あの妖精達に若干引きつつ、話を聞いていく。
話を聞いているうちにわかった事がある。
妖精にとって人間は栄養源なのだとか。
つまるところ人にとっての栄養補給が食べ物だとすれば、妖精にとっての栄養補給とは、人の側にいるという事らしい。あの妖精達の餌は自分だという事に気がついた途端、それはもう鳥肌が立ちまくった。
また、この国では人間の数が女王とやらに管理されているのだとか。だから位の低い妖精には人が供給されないらしい。
ちなみにこの村にいる妖精達は、餌である人が供給されず、段々と落ちこぼれていった成れの果てなんだという。というか妖精にも位とか落ちこぼれとかあるんだな。
種族が変わっていても、俺たち人間とはそんなに大差ないことに驚いた。
さて、ここで問題です。

餌である人が供給されないここの妖精達に、人を与えたらどうなるでしょうか？
答えは簡単。依存する奴は依存先の者を手放さないように――彼らは俺を掴んで離そうとはしない訳で、今よりももっと大事に扱われる事になる。
ここで俺がやらかした事の重大性を分かり始めた。
「○○？手が震えて……」
キャストリアに指摘されて、ようやく俺は自分の手を見るのだ。かたかたと震え上がっており、震えるその手で抑えようとしたが、それでも震えは止まる事がなかった。
――なんでだ……
「……大丈夫。大丈夫ですよ」
彼女が俺の震える手を両手で包み込むように握りしめ、何度も何度も大丈夫だと語りかけてくれた。
その手は暖かく、誰かを包む優しさを感じた。
すると、手の震えが自然と収まっていた。
震えが止まった頃、外では妖精達が戦う音が聞こえ始めていた。
外で何が起こっているのか、分かりたくはなかった。でも先程のキャストリアの説明から少なからず、察しはついていた。
この状況をいち早く分析しどうするべきかを考えたトリストラムは、ここからすぐに立ち退くべきだと告げる。
だがここから無事に出れたとして、果たして俺たちにいく宛があるのだろうか。
「ここを抜け、ブリテンの丘陵地帯へ行きましょう。丘を出たら国道があります。どの街に出ればいいかは、その後考えましょう。ですが、そのためには、まず外にいる見張りをどうにかしなければいけません……」
「私とキャストリアだけで無力化できる相手でも数でもありませんしね……妖精はどんなものであれ強力な精霊。人に太刀打ちできるものでは……」
暗い雰囲気がさらに暗くなる中、一筋の希望の光がやってきた。

「……よかった。みなさんまだ無事でしたね」
そこには妖精の少女がいた。
――前に見た時とは一部分変わってはいたが。
変化はとてもわかりやすいものだった。
片目が正体不明の闇のようなナニカに侵食されている、といったモノだ。アレを見た時、それはもう大丈夫なのだろうかと心配になった。でも今は少女の片目を侵食するナニカを気にするどころではない。
ひとまず妖精の少女から現在の村の様子を、一体村では何が起こっているのかを教えてもらった。
だが村の悲惨さを知っても尚、未だに信じられない自分がいる。だからテント越しに、彼らにバレないよう外をチラリと見やる。
俺の視線の先には、以前とは比べ物にもならないほど、変わり果てた妖精達が居た。
誰が俺という人間を手にするかなんて、本来なら話し合いで片付けられる物であるはずなのに、お互いを傷つけ争う事でしかそれを解決しようとはしない。己が生き残るために、例え他を殺し蹴り落としたとしてもだ。
自身が名を無くさないように、記憶をこれ以上無くさないために、なんとしても俺という人間を手に入れるのだというモノが見えた。
なんだよ、これ。
俺が人間だと知った途端、なんでこうなるんだ。
胸が、酷く――痛む。
「ダメです……もう以前のみんなじゃありません。血に酔い、どんどん凶暴なカタチへと変化しています。――いま、わたしが忍び込んできた場所へ。まだ布の張りが甘いので外へ出られます。森の外へは、わたしが案内します！」
妖精の少女に案内されるがまま、俺たちはこの村から逃げる事に成功した。

▽

「……早く、早く……村のみんなより、早く……」
「もっと、距離を離して……みなさんを、つれていければ……」
「……あと少し、あと少しなの……」
「ああ、風の匂い……懐かしい、ソールズベリーの土の匂い……」
「もうすぐ森を抜けられるんだ……もうすぐ……もうすぐ……」
「美しいブリテン、懐かしいブリテン……まだ、名前があった頃の、わたしの世界……」
「ふふ……ふふ……あと少し……あとすこしで……」
妖精の少女に手を引かれ、走る。
少女の手は氷のように冷たい。
以前感じた少女のおどおどした雰囲気は無くなっており、燃ゆるあの村で見た狂い争う妖精たちのような雰囲気をどこか醸し出しているように見える。
一度瞬きをして、もう一回少女を見ると、いつも見かけている少女の雰囲気だった。
気のせい、なのだろうか……？
走り続ける中、少女の息が徐々に荒くなってきている事に気がついた。それはまるで何かに身体を蝕まれているような息の荒さで……
不安になりながらもただ走ることだけを考え、俺の手を引き、一直線にひた走る妖精の少女の背中をじっと見つめていた。
少女は俺の手を握る力を強めてきたため、なんだろうと思い、少女の顔を横目にする。
目を濁しながら頬を赤らめつつも、その口元は三日月のようにニヤけていた。
この時、少女の様子が徐々に可笑しくなってきているという事にいち早く気がつくべきだったのだと今でも思う。

少女は走るのをやめ――
――歩くのをやめた。

そして掴んで離さないよう先程まで強く握りしめていた俺の手を、糸が切れたようにパッと離し、そして――バタリと倒れた。
「あ……あ、あああああ……!!」
何が起こった。
何があったのか。
歩みを止め、霧が覆うこの森の地面で倒れた妖精の少女を見る。
少女の片目を侵食していたナニカが――
テントの中で見た時よりもさらに広がっていた。
もう顔半分はソレに侵食されており、首から胸元あたりまで、そのナニカに喰われていた。
キャストリアは少女の異変にいち早く気が付いたのか、すぐさま駆け寄ろうとした。
だが。
「しっかり！か、体が痛むのですか!?なら、なら少しは……！」
「……うるさい。うるさい。
……さわるな、わたしにぃ！
――さわるなぁぁぁあああああ!!」
俺とキャストリアを見て、あの頃が懐かしいと小さく微笑むあの少女の姿はそこにはもう居なかった。
そこには居るのは、
――あの村の妖精の如く、凶暴になりつつある少女のみ。
「いたい……いたい、いたいの……」
「何百年もずっっといたいの、何百年も、ひとりだったの……」
「できないことばっかりおしつけられて、無理なコトばっかり溜まっていって……」
「今までたすけてくれなかったクセに、一度も……見てくれなかったクセに……」
溜まり切った水風船が破裂するように、彼女の感情は爆発する。
「いまさら、いまさら……！よかったことなんて……」
「バカじゃない、気がつかないの？だまされたのよ、あなたたち！」

「わざわざ連れてきたのだって、あなたたちを独り占めにするために決まってるじゃない！」
「あああ、わたし、なんで……」
「つめたい……つめたいよ……」
「ああ、ああああ……！」
――まって！いますぐに……
こちらへ手を伸ばす少女へ。
雪のように冷たく、溶けて消えてしまいそうなその手に。
俺は手を伸ばす。
今すぐにでも手を握ってあげたいと思った。
少しでもその冷たさを俺の手で和らげられるのならばと。
「――いけ、ません……！」
伸ばした手を掴もうと、彼女の元へ向かおうとしたのを、キャストリアが持つ不思議な形状をした杖に行手を遮られた。
――なんで、なんで……！
分かっていた。分かっていたのだ。
なんとなく、あのナニカに侵食されていたのを見たときには分かってしまったのだ。
もうあの妖精の少女は救えないということを。
それでも――
「……構えてください。――彼女は妖精ではなくなりました……！」
助けないと。
今も悶え、苦しんでいるあの少女を。
姿が変わってもあの少女は少女なのだから――
「あれは、モースです。語ることも聞くこともできなくなった生命。ただそこにあるというだけで世界を汚す黒い藻――妖精を殺す、ブリテンの呪い」
「もう、彼女は私たちが知るあの妖精の少女ではないんです……！」
目を伏せ、唇を噛み締め、何かを堪えながらも、彼女は言う。
もうあの少女はこの世界には存在しないのだと。
――……やるしか……ないんだな。

その問いに彼女は頷いた。
――ならせめて……
「援護お願いしますね、○○」
俺達は、モースいう影が伸びたバケモノに成り果てた一人の妖精の少女と対峙した。

▽

「まだ、力が残っているようですね。……なにか言いたいことでもあるのでしょうか……？」
戦闘は一対三だったからか、それなりに余裕を持って勝利を勝ち取った、と思う。
だが俺の精神は、その勝利を喜べるほどの余裕を持ち合わせてはおらず、むしろ瀕死に陥っていた。
救いは――ない。
キャストリアは何も言わず、ただ何もせずこちらを見つめるモースの様子を伺っていた。
なにかモースが喋ろうとした瞬間、見知らぬ誰かが俺の横を過ぎ去り、トドメの一撃を振り下ろした。
「失礼、無礼を許して欲しい。この一撃は、君たちには重荷に見えたからね……」
「ゴメンね。安らかにお眠り。次はどうか報われますように……」
一撃を振り下ろしたソイツは、あの少女のように背中から蝶の翅を持っていた。以前見た翅は傷だらけだったが、彼が持つそのモノは鮮やかな色を多く持ったとても綺麗な翅だった。
肩の丈ほどある銀色の髪の上には星のようなティアラを被っていて、服装は昔話に出てくる王子が着ていそうなモノを身に纏っている。
「やあ、はじめましてかな藤丸立香くん。出迎えが遅くなって申し訳ない――なんて、とつぜん言われても迷惑かな？……あれ、ほんとに迷惑そうな顔してるね！まあそれは置いといて、よし！王としてはど

うかと思うけど、僕には従者はいないから、もう自分から名乗っちゃうね！」
「僕の名はオベロン！人理に呼び出された英霊にして――この異聞帯で君たちを助ける運命を担う、ただ一人のサーヴァント。人呼んで妖精王オベロンさ！どうだい？カッコいいだろう！」
嫌な予感は、前からあった。
アルトリア・キャスターにとてもよく似てる子に、たまたま間違えて付けてしまった名を持つキャストリアに、トリスタンにそっくりな姿のトリストラムを名乗るモノ。
それにこの手の甲に宿る盾模様の赤い令呪。
不思議と分かる今着ているこの服装の使い方。
あげればキリがない程には、情報はあったと思う。
でもそれに気づいてしまえば、俺は後戻りできなくなってしまう。
そんな気さえした。
でも俺はもう後戻りできなくなるところまで来てしまった。気がつかなくてはいけない。
ここがその世界なのだということを。
ああ、ここがそうなのか。

第六異聞帯。
妖精円卓領域。
――アヴァロン・ル・フェ。
配信直前で寝落ちして、その話を見ることができずにいたが、配信内で説明されたあの冒頭の話は少し覚えている。
ようやく、この俺がいる世界は。
ＦＧＯの世界なのだという事を嫌というほど理解させられた。

――さいっあくだ……

四話

▽

転生と憑依。

転生。

現代日本において転生などといった言葉は、殆どの意味で生まれ変わりを指す。因みに転生を英語で言うとリインカネーションなんて言うらしい。転生っていうよりはリインカネーションの方が言葉の響きとしてはカッコいいよなと俺は思うが、これはさておき。

今、俺が現在進行形で体験しているモノ。

それは生まれ変わりを意味する転生、ではなく間違いなくあの世界で生きていた筈の――誰かの身体へ憑く、文字通りの憑依だった。

それも憑いた先が、あのＦＧＯにおけるあの主人公の身体、だなんて誰も思わない。かくいう俺もその一人だ。

目が覚め、俺が間違えてアルトリアキャスターをキャストリアと呼んでしまったあの時点で、もう主人公である藤丸立香の身体に憑いてしまっていたんだ――

それでも俺はここがＦＧＯの世界線だということを否定し続けた。否定し続けなくてはいけなかった。認めてしまったら、俺はその時点で残酷でいて儚くも美しいこの世界で生きなくてはいけなくなる。

そう思っていたからだ。

よく知るゲームのキャラに似てる人物を見た。

――そっくりさんかコスプレだろう。

戦闘の中で魔術を扱うところを見た。

――そんなもの、異世界に行ったらよくある事だろう。

着ていた魔術礼装の使い方を、俺は知らない筈なのに身体は何故か覚えていた。

――……分からない。

右手の甲に刻まれた盾を連想させる模様の令呪。

――嫌な予感が、した。

でも、現実ってのはどうにもならないほどに残酷で、厳しいものなんだ。

お前は、藤丸立香の身体を――

――ああ、認めなきゃ、いけなくなっちゃったじゃあないか。自分が知らずにも”やってしまった”事を。

心のどこかでそうでなければと、何度願った事だろう。もしも、俺をこの身体に憑依させやがった神様ってのが本当にいるのだとすれば、一つだけ言わせて欲しい。

――くそったれ、地獄に堕ちろ。ってさ。

▽

妖精王オベロン。

彼は俺の姿を見て藤丸立香とそう呼んだ。

あの、藤丸立香なのか。

俺が……藤丸立香。

彼の姿を見て他のみんなは、己の名前を取り戻した様で、各々が己の名前を噛み締めていた。

トリストラムは、やはりトリスタンで。

キャストリアは、アルトリア・キャスターだった。

そっくりさんでも、コスプレでもない。

土地の縁を頼りに召喚された英霊がトリスタン。

この異聞帯に住む住人がキャストリアもといアルトリア・キャスター。

キャストリアが実は英霊ではないということに、それなりに驚きはしたが、それで何かが変わるわけではない。彼女とは友達くらいの関係でいられたのなら嬉しいなとは、ちょっぴり思った。

▽

俺たち四人は情報収集の為、この異聞帯――妖精國ブリテンに四つあるとされるうちの一つの街、ソールズベリーへと向かっていた。
そして今、俺らがいる場所は、あのコーンウォールの森を抜けた先にある平原のど真ん中。キャストリアによると南側に位置するとのこと。
俺たちがコーンウォールを抜けた辺りからこの世界の空は夕焼けとなっていたが、ソールズベリーを目指す内に暗い闇に包まれ始めた。
周辺はもう見えない程に暗く、オベロンがこれ以上進むのは危険だと判断した為、今日はここで野宿する事になった。
キャストリアは簡易的な魔術を扱って、焚き火を起こすのだが、それをライターも無しにやってのけるのだから、魔術とは実に神秘だなぁと、ど素人並の感想しか浮かばなかった。
オベロンとトリスタンは少し用事があると二人して、向こうの茂みに行くと言ったきりまだ帰ってこない。俺とアルトリアの二人が残された。
燃ゆる焚き火の炎から、無数の火の粉が舞い散るのを見て、つい呟いてしまった。
――藤丸立香、かぁ……
小声であるのにも関わらず、どうやらそれは彼女に聞こえていたようで、不思議に思ったのだろう。
「〇〇、どうかしたんですか？」
アルトリアはそう言った。
焚き火の明かりによって彼女の顔がよく見える。
気を抜けば今すぐにでも寝てしまいそうな表情をしている。
辛うじて彼女が起きていられるのは、恐らくあの時俺が言った事が気になってるからだろう。
だが、何故彼女は俺を藤丸立香とは呼ばずに、俺の名前で呼ぶのだろう。
――いや、なんでもないんだ。それよりもキャストリア……いやアルトリアはなんで俺の名前をそう呼ぶんだ……？

するとアルトリアは、お前は何を言ってるんだ？といった表情を浮かべて、
「もしかしてオベロンが呼んでいる方が良かったでしょうか……？私的には、こっちの名前の方があなたにあってる気がして――まあ、あなたが嫌なら私も呼び方を変えますが……ダメでしたか？」
――いや、好きなように呼んで欲しい。その方がそっちも楽だろうしさ……
「では、これからも○○と呼ばせていただきますね！えへへ……」
わーいって子供みたいに手を広げて無邪気に喜んでいるアルトリアを見ていると、ほんの少しだけこの世界に来て良かったんじゃないだろうかと勘違いしそうになる。
でも、キャストリアのその言葉に、ほんの少しだけ俺は救われた気がした。
――……そっか、ありがとアルトリア
「――あと、わたしの事もアルトリアではなく、キャストリアと呼んでください。その方が、おそろい感あって、友達みたいじゃないですか」
ね？と、上機嫌に言うキャストリアの顔は、闇夜を輝かせるように燃ゆる火の光によって、温かみを感じさせる赤らみを帯びるように、ほんのりと照らされていた。その光景は、妖精としての彼女を、より妖精たらしめるかの如く、酷く幻想的だった。
――友達……うん。改めてよろしくキャストリア
俺はキャストリアの手を手に取って、軽く握りしめ握手の形をとった。
だが、それを見ていたキャストリアはどうしていいか分からずに戸惑っていた。今のキャストリアの様子を見るからに、この異聞帯にはもしかすると握手の概念がないのかもしれない。
だから、俺は元いた世界にはそういう習慣があるんだという事を簡潔に伝えた。
「そういう、習慣があるんですね。なるほど、とても気持ちの良いものなんだ。握手って……」
えへへと、キャストリアはまんざらでもない顔で、この異聞帯にお

いて異文化のものであるそれを容易に受け入れていた。
軽く握った彼女のその手は、細長くしなやかな曲線を描いていて、まさしく少女の可憐な手だった。これが手袋越しだとしても、俺は嬉しかった。
よろしくなキャストリア。と内心俺がそう思っていると、なにやらこちらを見やる二つ分の視線を感じた。どこからくるものなんだろうとキャストリアに悟られないよう探すのだが見当たらない。
また、今は夜な為に辺りは暗く、視線の正体を見つけるというのは、中々に困難なものだった。
だが。
「ああ、あれを見てくれトリスタン。僕たちはとても尊いものを見ている気がするぞぉ……」
「ええ、私もそう思います……これが、尊いというものなのですね」
すぐ近くの茂みから二人の声が聞こえてきた。
もしかして、あの二人。あそこで俺たちの会話を楽しく観てやがったのか……？
しかもさっきから尊い尊い聞こえてくるのだが、一体あの人たちは何が尊いのだろうか。

「よしよし、彼らの仲は順調のようだ。例え中身が変わっていたとしても、彼の本質は変わらないということだね。……だとすれば僕たちの勝利条件も変わらないってことだ……」

▽

――ここが、ソールズベリーか……！
妖精の街と言われて、それは大層凄いものなのかなと期待に胸を寄せていたが、人が造りし街と対して変わることのない、西洋の技術を用いて造られた家々が建ち並ぶ。窓はガラスではなく木材で作られていて、それは真上に動くもののようで、降りてこないように一本の

つっかえ棒で固定して、風通しや光が当たるようにしている。
また作るのが大変そうなあのグリーンカーテンなるものも壁際に作られていた。いいなアレ、夏になるとあれが日陰になって涼しいんだよな……
石畳でできた道の真ん中には、細長くつづく噴水が造られており、その周りを囲うように色とりどりの花を咲かせた低木が丁寧に植えられている。
噴水は時間経過とともに、並べられた振り子が連動するように、低く湧いていた水が予備動作を見せた後、高く打ち上がった。
瞬間、線香花火を思わせる無数の水飛沫が一斉に飛び交う。それは殆ど石畳の道に落ち、水玉模様を形作ったが、その内の幾つかは俺の顔へ降り注いだ。おかげで髪は多少濡れてしまった。すぐに乾くとは思うから気にはしない。でもこれがほどよい冷たさで、少し心地が良い。
それはさておき。
一つ疑問があった。
この街に来たはいいが、人はまだ見かけていない。
今のところはと言うべきだが、あんな事があった為、できればいてほしいと願う――
右を向けど、左を向けど、妖精だらけ。
幸い、あの妖精たちはコーンウォールの時の妖精たちとは違うことだけは分かった。感じる視線だとかそう言った類のものに狂気はなさそうと見た。
でも見る妖精みんな笑顔なのが、かえって不気味だ。あの時みたくならなければいいのだが……
キャストリアはこれを見て「この街はこれが日常なんです」と言うのだが、これが日常って……
表情筋さんが過労死してしまうぞ、大丈夫かあの妖精たち。
街中をぶらぶらと歩く途中、オベロンからこの異聞帯で生きる人間、について詳しく説明された。本来はもっと後に言うつもりだったらしいのだがと口にしてはいたがな。

あの村である程度はキャストリアから聞いていた為、この異聞帯において人の待遇は知ってたが、まさか自由権もとい独立権なる物を獲得した人間もいるのだと思わなかったが。

まあその他の人間の扱いは聞いていた通りだった。

俺は生きるための餌なのかなとは思ってたが、実際は妖精社会を豊かにする為の道具、または奴隷なのだと言うもんだから、より扱い酷いんだなと思ってしまった。なんだが妖精という存在が人間並に怖く感じた今日この頃。

また汎人類史の方でもこの異聞帯でも俺たち人間は妖精たちにとって退屈しのぎの嗜好品でしかないそう。俺たち人間は、彼らにとっての酒みたいな類のものなんだな。

「はぐれてしまった君の仲間を捜す為にも、ひとまず酒場に行こうか。ヒトが集まるところには耳寄りの情報があるからね」

さあ酒場へ行こうかとオベロンは言うのだが、キャストリアは小難しそうな表情を浮かべ、無言でその場に立ち尽くす。

そんなキャストリアを見たオベロンはニヤリと何やら悪巧みをしていそうな顔で、彼女へこう告げた。

「あー、ところでアルトリア。この街で主のいない人間が見つかったときの処遇を知ってるかい？」

それを聞いたキャストリアはなんだか冷や汗を流し、表情を強張らせていた。

「牧場から逃げ出した脱走者として捕まり、ニュー・ダリントン送りさ」

「……『国立殺戮劇場』の、ダリントン!?でで、でも、ここ自由の街ソールズベリーですよ!?風の氏族の長が統治するこの街で、そんな酷い仕打ちをするはずが――」

今、普段キャストリアの口からは聴かないような、殺伐とした言葉が聞こえた気がする。

なんだ、国立殺戮劇場って……

名前が物騒すぎるぞ。妖精ってそんな事までするのか、だとすれば妖精たちはそうとう拗らせてるに違いない。うん、きっとそうだ。

「長とはいえ、女王の決定には逆らえないさ。だからこそ信頼できる協力者は一人でも多い方がいい」
「この子は右も左もわからない迷子、しかも人間だ。僕は見ての通り王子だから出自不明な人間を『自分の従者』として言い張るのは無理がある」
　俺の頭を優しく撫でながら、何処その悪の総帥みたいな表情を今もキャストリアに向けるオベロンは話を続けた。
「だが君ならばこの子と釣り合いはとれている。ずっと一緒とまでは言わないさ。ソールズベリーにいる間だけでいい。なにより――君だってその方が都合がいいだろ？」
「……確かに……ひとりでいると職質されますもんね、今のブリテン」
　一人空を見つめ、哀愁をその身に漂わせるキャストリア。その反応を見れば一目瞭然。過去に何度か、どこかの街で一人でいたキャストリアは問答無用で職務質問されたのだろう。
　ああ、見える。
　警察の役割を持つ妖精に、一人でいるキャストリアが捕まって職質されているところが見える。
　これは、脳内再生余裕ですわ！
「でで、でもでも人間を従者に出来るのは、じょじょ、上級妖精で。わたしが〇〇のご主人様になるってコトで――」
「あ――うわべだけの話だけどね？それともアルトリアは彼の事をペットにしたいのかな？」
　ニヤニヤしながらキャストリアを揶揄っている妖精王オベロン。
　いいぞ、もっとやれ。
「えへへへ、それもいいかな……――はっ!?
　わ、わわわわたしにはまだそういうことは早いですって！いや、ほんとに勘弁してください！」
　翡翠色に輝くその双眸は渦を巻き、彼女の顔からはぷすぷすと煙が吹き出し始めていた。
「よし決まったね」と、その一連を見ていたオベロンは指をパチンと鳴らし、続けてこう言った。

「しばらく君はアルトリアの持ち物となる訳だが、この妖精國で安全に旅する為だ。ひと芝居うてるね？」
オベロンの悪ふざけという名の船に、俺は乗り掛かる事にした。
理由は簡単――そっちの方が面白いから。
――これからよろしくお願いいたします。我が主、アルトリア
俺は主人に付き従う従者を演じるべく、キャストリアの前で文字通り跪いた。
隣にいたオベロンは今にも笑いそうなのを必死に堪えていて、トリスタンは苦笑いを浮かべている。
肝心のキャストリアは――フリーズしていた。
まるでそこだけ時が止まっているかのようだった。
悪ふざけが過ぎたのだろうか……？
「――」
「わ、悪ふざけが過ぎたようだね……っ。アルトリアには刺激が強過ぎたようだっ……」
おい、オベロン。笑うか喋るかどっちかにしてくれ。思わずこっちも笑いそうになるじゃないか……！
なお、アルトリアがスタンを喰らったサーヴァントみたいに動かなくなってしまったせいで、俺たちが酒場に向かうのは数分も後になったのは言うまでもない。

▽

酒場に入った途端、オベロンが酒場中にいる人たちに向かって挨拶をかましてくれたおかげで、元々賑やかだったものが更に賑やかになってしまった。オベロンの影響力は凄まじいモノだと確認させられた気分になる。
でも周りのヤジの中に、ツケだとか、前に貸した金だとか、お金は返してね？だとか入っていたのは何故だろう。
もしかし無くともこの異聞帯でオベロンが何かやらかしているのだろうかと、少し気になった。

途中、無一文の下りから始まり、オベロンの召喚されてからの話がここで語られる事になった。
裸一貫で目が覚めた後、地道な活動を得てこのブリテンで名を挙げたのだという。
ずっと立ち続けるのも流石に疲れるからと、オベロンは自身のお気に入りの席へと俺たちを案内する。
そのついでとばかしに新しい給仕さんとやらに果実水四つを注文していた。
お金は大丈夫なのだろうかと不安になりつつも俺はオベロンに案内された席にそそくさと着こうとした。
その瞬間、ゲーム内で何度も聴いたあの声をふと耳にした。
思わず、え?と反応をしてしまった事が良かったのやら悪かったのやら……
そこにいた新しい給仕とは。
――レオナルド・ダ・ヴィンチ（ライダー）だった。
なんでここにいるんですかね、ダ・ヴィンチちゃん。
白黒の給仕服を身に纏い、その小さな背中に背負った茶色のランドセルからは、メカメカしい巨大な義手を生やしている。
よくその状態で給仕が出来るなとツッコミたいところだが、どうやら移動する際は引っ込めているようだった。
「え――」

五話

▽

「もう、聞いておくれよ！」

ダ・ヴィンチちゃんもといロリンチちゃんは今までの体験した出来事を愚痴るようにして語った。

霧で俺が憑依する前の藤丸立香とマシュの二人とはぐれた後、間に任せて歩いてたんだそうな。

海岸越しに歩いて東に向かっていたところ、このソールズベリーに流れ着いたのだと言う。

そして色々とあってこの酒場の店主の元でバイトしながら、情報収集していたんだと、店主と漫才を繰り広げつつも、俺の――いや藤丸立香の無事を大いに喜んでいた。

俺、藤丸立香じゃないんだけどね、なんてこの状態で言ったらどうなることやら。考えたくもないのだが……

何気にオベロンが既にロリンチちゃんへ挨拶を終えているのを見て、やる事が早いなと思った。

そしてキャストリアもロリンチちゃんへ挨拶をするのだが、

「はじめまして、ダ・ヴィンチちゃん。私はアルトリア・キャスター。森で〇〇と知り合いまして、色々あって〇〇さんの持ち主として……その、一緒にいさせてもらってます」

彼女は、俺がカルデアの人達に隠さなくてはいけない今にも爆発しそうな爆弾を、ものの数秒で見事大爆発させてしまった。

あー、やっちゃったか……

「なにそれ、面白ろ～い！それなら立香君も安心だ！

――後で個人的に話があるんだけど、いいかな？」

ロリンチちゃんはキャストリアの話にくすくすと笑いながらも、俺のすぐ側に近寄り、耳元でそう囁いたのだ。流石カルデアの技術顧問だ、と冷や汗が止まらない。

恐らく彼女がそれに気づいたのは、キャストリアが言ったときのあの名前だろう。あれ以外にも気づかれる点は幾つかあっただろうが、一番はキャストリアの自爆だ。藤丸立香ではない俺の名前で言ったのだ、そりゃあ関係者なら嫌でも気づく。

仕草とか、言動とか、彼と俺とでは違う。だから、彼らと今後行動しているうちにいつかはボロが出て、そうじゃないかと気づかれてもおかしくはなかったと思う。まあそれが早まっただけに過ぎない。

でもこう言うのって時間をかけて徐々に分かるものなのだが、そんなのアリか……？

仕方ないと思いながら、この後連行されるだろうという事を覚悟しつつも、話に耳を傾ける事にした。

「ありがとう、アルトリア。ある程度は我々の事情を聞いてると思うけど、その上で――藤丸君に手を貸してくれたのかい？」

「――実を言うと、半分もわかってないんですが……○○が嘘をついていないのは分かりましたし、それに――面白そうだなって」

「そっか。なら大丈夫だね。じゃあ藤丸君、これまでの話を頼んだ！」

――え……あ、はい！

ロリンチちゃんに促されるまま、俺は俺が目覚めた彼処からここに至るまでの話を、正直話をまとめるのは下手くそだが、俺なりに簡潔かつ丁寧に語らせてもらった。

「なるほどねー。護衛ありがとうトリスタン。それにオベロン、アルトリアもありがとう。――さて藤丸君の説明で、分かったことは四つある」

『まだブリテンの事をよく知らない』、『マシュの行方はわからない』、『でも、マシュが無事なのは確か』、『後、オベロンは無一文』の四つ。

ロリンチちゃんはあの説明の中でわかった事を四つにまとめたが、最後のオベロンが無一文というところをヤケに強調して言ったせいか、さっきからそう言われた本人は不満そうな顔を浮かべている。

「これだけハッキリしているんだ、今後の対策はすぐに立てられる」

「でも我々がすべきは頭なく移動することじゃない。なのでここソールズベリーを拠点に、情報を集めて、立ちはだかる問題を一つずつク

リアしていこうじゃないか」
「最優先事項は『マシュの捜索』だ」
分かりやすく、どこからとも無く取り出したホワイトボードに目的とやる事を書き出してくれたロリンチちゃん。
なるほど、と感心しながらも、俺は今はいない藤丸立香の為にも最優先事項とされるマシュの捜索を達成するという事を。
藤丸立香の代わりとして――それを最初の目的にする事にした。
でも拠点はどうするんだと思っていたら、俺の表情を読んだのかロリンチちゃんは、
「ああ、拠点の事なら私に任せてくれ。この酒場はね、宿屋も兼ねてるんだ。……といっても人が作った宿屋を真似た建物なんだけどね」
と、宿屋を知らなかった店主にそれを提案したという事、その対価として二階の部屋三つほど徴収したという事を、まるで美談のように笑いながら言うモノだから、こればっかりは俺も苦笑いを浮かべるしか無かった。
流石、カルデア技術顧問。
やることなすこと無駄がない。
藤丸立香とマシュの二人とはぐれても尚、一人で行動を起こし、いずれ二人と合流する事を想定した上で、この異聞帯における拠点をもう既に作っていたというのだ。もはや凄いとしか言いようが無かった。
第六特異点においてもそうだったが、ダ・ヴィンチちゃんが居れば大抵の特異点や異聞帯も、ある程度は楽に攻略できていたような気がする。
まあ、あの時も、今も、特別な事情だったからこそ彼女が参戦しているのだとは思うが……
この先に何が起こるかは、二部六章配信手前で寝落ちしてしまった俺には分からないが、なんとかなると思う。
俺の知る藤丸立香は、どうしようもなかった状況を、現地の仲間達と共に何度も何度もひっくり返してきた。奇跡とも言えるような必然を、引き起こして。

この身体に恐らく眠っていると思いたいが……せめて主人公が帰ってくるまでには、その奇跡を起こさせる準備を、俺が代わりにしなくちゃならない。
それが――彼の代わりとして、俺がするべき事なのだろう。

▽

オベロンは俺たちとは別行動をすると言って後をロリンチちゃんに託し、藤丸立香率いるカルデア一行が来た事によって、変化が起きたとされるブリテン全体の情報を収集すべく酒場を後にした。
「頼りになるけど、ずいぶんマイペースなサーヴァントなんだね。――さてと、みんな今日は歩きづめだったんだろう？欲張って三つ押さえておいてよかったよ。ぜひとも二階の部屋を使って使って」
俺で一部屋、トリスタンとロリンチちゃんで一部屋、アルトリアで一部屋と、もう既に部屋割りは決まっていたようで、ロリンチちゃんに促されるまま俺たちはそれぞれの部屋へ行く事になった。
もちろん俺はロリンチちゃんに連行される形で部屋に連れられた訳だが。
今は、どうしてこうなったんだろうって。

「なるほど、君の事情はよく分かった。
――その上で、今はいない藤丸立香君の代わりとして我々に力を貸してほしい」
暫くの間、隠そうとしていた藤丸立香の不在と、俺の存在。そして俺が、カルデア側の事情をある程度知っているという事。それらの情報をどこで手に入れたかは言えなかったが、大体のものはこの場で全てゲロった、というか吐かされた。
それはもう刑事ドラマ並みとまではいかないが、彼女らしい誘導尋問に上手いこと引っかかって。
なんて我ながらアホだなとは思う。

全てが伏線だったとかそんな無理ゲーやめてくれ。
こんなん勝てるわけがない。
一度こうゆうのやってみたかったんだーと、きゃっきゃと喜んでいるロリンチちゃん。
まあロリンチちゃん相手に隠し通そうとするのは無理だった、というわけだ。
元より藤丸立香の代わりになるかは分からないが、彼が戻ってくるまでの間――俺は彼の代わりとなろう。それが、他の誰にも出来ない、今の俺の役目だから。
――こんな俺で良ければ……彼が、藤丸立香が帰ってくるまでなら。彼の代わりが務まるかは分かりませんが、俺の出来うる限りを尽くします。
「……ありがとう、かな。まあ君も知っている前提で話すが、こちらとしては願ったり叶ったりだ。――さて、ここからが本題となるんだが。隣の部屋に居るトリスタンも交えて、二人には私がここで調べ上げた情報を共有しておきたい……」

▽

トリスタンを交え、ロリンチちゃんが独自で調べてきたとされるブリテンで知った情報を共有する事になった。その中には気になる情報が幾つかあった。
俺が気になった情報の一つ、予言の子についてだ。
予言っていう類のものが当たるなんて事、俺は信じちゃいないが、こんな世界だ。
俺がいた現実において予言なんて数撃てば当たるとはよく言ったものだし、実際数ある予言の中には当たっていないものもある。
だがしかし、この世界には過去未来現在を見通す魔眼なんてものが平気で存在している。なんなら、確定された未来を見ることすらできてしまうのだから、この世界における予言を馬鹿にしてはいけない。

ロリンチちゃんは言うにはこの予言の子とやらがモルガンを打倒するための希望するなのだと。
一応掻い摘んで教えてもらった予言の内容を聞いてはいたが、何か引っかかるような気がしてならない。
『今から十六年後、救世主が現れる。選定の杖に導かれ、真の王が戴冠する』
『六つの鐘が響くとき、偽りの女王は倒される。妖精と人間を従えて、偽りの歴史を終わらせる』
その救世主とやらが恐らく予言の子なのだろう。
救世主は選定の杖に導かれ、真の王の戴冠。
六つの鐘に、偽りの女王は倒され、偽りの歴史が終わる。偽りとは一体……

カルデアの目的はこの異聞帯――妖精國ブリテンの何処かで起きている汎人類史に影響しかねない謎の崩壊を止める事と、打倒ビーストの対策として、ロンゴミニアドの兵器の回収またはその製造法を調べあげる事。それさえ果たせたならば、この異聞帯から離れ、最後の異聞帯へ乗り込む、それだけだ。
そして俺と出会いここまで連れてきてくれたあの妖精王オベロンは言っていた。
この異聞帯を救う事こそが、汎人類史を救う事になると。この國を支配する女王モルガンを倒せば、救われるのだと。
予言と、モルガンの打倒。この二つがどうにも引っかかる。
本当にモルガンを打倒すれば、この異聞帯から観測された崩壊を止める事ができるのか？
まだ得体の知れない何かが、この異聞帯にはあるのではないか。
それに真の王の戴冠だ。
これが示すのは予言の子、もしくはそれに連なる他の誰かが、新たな異聞帯の王として君臨し、カルデアと敵対する事になるかも知れない事。
杞憂かも知れないが、こう言う可能性もあるという事だけは覚えて

おこう。
空想樹を失った異聞帯とはいえ、まだ――何かあるのだ。
まあこれ以上考えても仕方ない、
考えるのはやめだ。
「モルガンとの交渉もだが、もちろん今はマシュとの合流が先決だ。君も色々とあった事だろう、だからこそ休息は必要だ。まずは休んで体力を回復して……それからだ。明日からは忙しくなるぞ～」
――……色々と、ありがとうございます。
ロリンチちゃんなりに俺を気遣っての事だろうなと、トリスタンとともにこの部屋から出て行くその後ろ姿を見てそう思った。

藤丸立香は、この身体にはいない。
いつ帰ってくるかもわからない。
それなのに俺は、彼が帰ってくるまでその代わりを果たそうとしている。俺に彼の代わりは務まりそうもないのにな……
――久々の、柔らかいベッド……
本来なら考える事がたくさんで眠るなんて無理に近い筈なのにこの身体は正直のようで、ベッドに入り横になった瞬間、プツリとテレビの電源が切れるかの如く、俺の意識は闇に落ちた。

▽

それは果たして夢なのか現実なのか分からない、不思議なところで、
――俺は藤丸立香と思わしき青年と出会った。
俺がゲームを通し、見てきたあの藤丸立香だ。
だが、彼は第二部の黒の極地用カルデア制服ではなく、第一部の、白を主体としたあのカルデア制服を着ていた。
初めて顔を合わせた。
見慣れた顔つきに、何処その正義の味方と似たようなボサボサした黒い髪。

大空のように青く澄み切ったその双眸は、さまざまな英霊を受け入れる広い器を表しているように見えて、これが藤丸立香なのかと感心させられたような気がした。
そんな彼を見て、俺はどうしようもなく死にたくなった。なんで俺なんだ。なんで俺だったんだ。
今も尚、世界を取り戻そうと翻弄していた彼を、俺と言う存在が……
その場で崩れ落ちる俺を見た彼は、怒ることも悲しむこともせず、ただ俺の側に近寄った後自身も座り込んで、まるで自分自身を励ますかのように肩をポンと軽く触れてくれた。
この俺に対して嫌な顔一つせず、にこやかに微笑む藤丸立香の表情を見て思った。
なんで怒らないんだよ……
普通なら俺に微笑むどころか、罵倒や怒りといったものが来る事を予想していたというのに。
だが、彼はそれをしなかった。
――なんで……
この時、今まで言葉を話さなかった彼はようやくその重い口を開いた。

「だって、俺は、俺だからさ……」
――なんだよ、それ。そんなのアリかよ……
「ありよりの――あり！」
雲一つない、澄み切った青き空を思わせる笑顔。
誰に対しても分け隔てなく対応する彼は――藤丸立香は、やっぱり藤丸立香なんだろう。
これはどんな英霊も好きになる訳だ。
「色々あって辛かったかもだけど、別に俺は消えたわけじゃないから気にしないでほしい……って言っても気にするよね。だって同じ俺だし……」
「オレは、俺に言いたい事が沢山あるだろうけど――実は話せる時間、

もう残されてないんだよね！」
あははと、割と深刻な事を言っている筈なのに、一ミリたりともそう感じさせないくらい笑いながらも彼は続けた。
「使えるのは三回きりだけど、これを渡しておく。前の俺が、俺に託してくれたものなんだけどさ……」
――なにを、言って……
藤丸立香はある物を俺に渡し、決して無くさないように握り締めさせた時には、既に彼の身体は徐々に薄く、散りかけていた。
――待って、待って欲しい！
――まだ言わなきゃいけない事とか沢山ある！
――それに、それに！

――カルデアのマスターは、
――マシュの先輩は、

――俺なんかじゃない、お前なんだ！

消える彼の手を取ろうと咄嗟に手を伸ばすが、遅かった。伸ばしたその手は虚空に振りかざされ、そこに居たはずの藤丸立香は――もう居なかった。

「……意味わかんねぇよ、藤丸立香――」
この不思議な白い空間に取り残されたのは、黒のカルデア制服を身に纏った俺だけだった。
酷い虚無感が、俺を襲い、意識を失わせた。

――……なんだ、夢、か……
知らない天井で目が覚めた。

見た夢の内容はもう忘れてしまったが、何かとても重要な何かを、渡されたような気がする。
――ん……？
なんだろうと、起きているにもかかわらず何かを大事そうに握り締める右手を見つめた。
感触的には硬い石のような物だ。
夢で、俺は何を渡されたんだっけ……？
疑問に思った俺は右手を開き、手のひらの上に乗るそれを見てしまった。
そこには
――三つの聖晶石が虹彩を放ち、存在していた。
かつて見ていたあの虹色の輝きとは全くと言って異なるそれは、何色にも染まるキャンバスのように純白だった。
この三つある白の聖晶石。
これは一体何なんだろうと、朝早く起きてしまった俺はその存在に頭を悩ませる事となった。
――藤丸立香、アンタは俺に何をして欲しいんだ
柔らかな素材でできた枕に顔を埋め、俺は今はいない主人公に縋るようにそう言った。

六話

▽

――何も、掴めなかったね……

ソールズベリーの街で半日程、鎧を着た少女についての情報を捜し回っていたが、得られた情報の殆どが『予言の子』についてと『厄災溜まり』についてばかりだった。

一日程度で手がかりが掴めるとは思ってはいないが、こうも予言の子ばかり話題になっていると、欲しい情報がなかなか出てこない気がしてならない。

にしても予言の子とは誰のことなのだろうか。

前にロリンチちゃんから聞いた話によれば、異聞帯の女王モルガンは今年で十六になる妖精を捕まえ始めているらしいが、未だに例の予言の子とされる妖精は捕まっていないらしい。

尚、ロリンチちゃんは、俺たちと共にマシュの情報を捜し回っていた中で散々妖精たちに聞かされた予言の子に、それはもう興味が湧いている様子。

終いにはマシュの捜索と並行して予言の子を探してみよっか？なんて言い出す始末。

行動力の化身か己は。

かく言う俺も、その予言の子について気になってはいる。現状、モルガン打倒の鍵になりうる存在だからな。

でもその予言の子が行動を示したという事は、妖精たちから聞いたモノの中には無い。

だから考えられる事は一つだ。その予言の子は今も何処かで力を蓄え続けているのだろう。

そう、きっと……

「……うぅ」

それよりもさっきから俺の背中に顔を埋めているキャストリアは一体何を考えているのだろうか。

まるで己の恥ずかしい黒歴史がふと知人にバレてしまい、顔が合わせられなくなったという、そんなものを連想させる顔の埋め方だ。
こいつは何かあるなぁと思いつつ背中に張り付くキャストリアを引き剥がそうとするのだが、なかなか剥がれようとはしない。その手の握力のみでこの極地用カルデア制服に付いているのだろうか。
握力ゴリラかお前は……
「昨日ぶりだね。何やら楽しそうな事をしていると思えば……
――おや、アルトリアまだ言ってなかったのかい？」
予言の子を話題にしていたら、昨日ぶりに見たオベロンがこの酒場ににょろんと顔を出して入ってきた。その時言っていた彼の言葉が妙に意味深だった。やけに強調して言うものだから余計気になる。
「――君がその『予言の子』だって事」
予言の子という言葉に反応して、キャストリアはより俺の背中に顔を埋める。っておい、引っ付き過ぎだって。
何か妙に柔らかい二つのモノが背中に当たってる感覚に戸惑いながらも、俺はロリンチちゃんの言い分を聞く。
「いやまあ、そうだろうとは思うかもだけどさ。だってその――控えめに言ってアルトリアの魔力量、妖精たちの中でも平均以下だよね!?」
「魔術回路、いや妖精だから神代紋様かな。人間よりかは上だけど、妖精の中じゃ下の方だ」
「もしかしたらマイクの方が強いくらい！
アルトリア、ほんとに!?
キミが女王を倒す『予言の子』なのかい!?」
そう言われたキャストリアは俺の後ろからひょっこりと、顔だけを出して、
「そ、そうですよね、やっぱりそうですよね!?」
「ごめんなさいごめんなさい、わたしなんかが選定の杖を持っててごめんなさい……！」
「でででも、私が『予言の子』だって決まったワケじゃないっていうかぁ……」

「そもそもわたし、女王と戦う決意とか気魄とか、根性とかないし……」
「氏族の妖精でもないし……魔力も少ないなら、魔術でなんとか誤魔化すしかないし……」
「鐘を鳴らせって言われても、そもそもな話近づけないし……いえ、頑張ろうと言う気はあるんです。ええ、ありますとも、はい……」
「でも……現実はとても厳しくて……
はは……なんでわたしなんでしょうか？」
自嘲気味にそれらを捲し立てるように言うキャストリアを見ていると、どこか放っておけないような気がしてならない。
いつか自分を滅ぼす、そんな気がして……
――キャストリア……
「でも大丈夫。私が本当に『予言の子』であれば、戦う手段は残されていると思うんです」
「わたしはそのために生まれ、そういうふうに育てられたんですから――なーんて、カッコつけて言ってみましたが、なんの展望もないしダメダメなんですよね……！」
彼女の翡翠色に輝く双眸は激しく揺れ動く。
それでも、彼女は『予言の子』を背負うつもりなのだろう。今はまだ、俺と同じように迷ってばかりだけど――ツボミがいつか花を咲かせるように、彼女も迷いを振り切って選び取るのだろう。
自分の運命を……
「なるほど……それでかぁ。妖精たちは魔力の質も量も一目で分かっちゃうからなぁ……」
「そうなんですよね……氏族の長に認めてもらおうとしましたが、門前払いされちゃいまして……」
ロリンチちゃんにそう言われた事に、動揺しつつも同意してる辺り、他のとこでも似たような事があったのだろう。
物語的に言えば、まだ彼女は誰にも認められてないから、何かしら物事を解決して認められなければいけない、のかもしれない。
俺に出来ることといえば、精々キャストリアの手助けくらいか――

どうしようかと悩む俺たちだったが。
ここで、オベロンはキャストリアの悩みを今すぐにでも解決できると、まるで救いの手を差し伸べるかのように告げた。
「その程度なら今すぐにでも解決しようか」
「今だと、そうだなぁ……風の氏族長――オーロラへの謁見ならできるけど、する？」
俺ら一同、何が何だか分からないまま――

気がつけば、ソールズベリーの中心に建てられた鐘撞き堂もとい大聖堂の中にいた。
「ほら、簡単に入れただろう？」
とオベロンは平然に言い切り、上に行こうとするのだが、明らかにこの大聖堂内は俺たちを上へ行かせるという雰囲気では無い。
それに、人の身の俺を下等生物と罵り、受け入れようとはしない一人の妖精が現れた。
その妖精に指示されたのか、次々と俺たちの周りを鎧甲冑を着込んだ衛兵達がぞろぞろと囲み始めた。
「あれれ？思ってた展開とちょっと違うかな？」
――何が何だか分からないまま、俺たち囲まれちゃいましたね!?
「あはは、ごっめん」
この世界に来て三回目になる戦闘がまさかこのような形で始まるとは思いもしないぞ、この野郎。

▽

「どうだ、見たかコーラル！僕と彼の実力を！
貧乏王子とか人間如きとか甘く見てるから足を掬われるんだ！」
「（オベロンは何もしてませんよね）」
――（激しく同意、っても俺も何だよなぁ）
「（指示や援護は荒削りだけど、キミは変わらずしっかりできていたさ

藤丸君)」
一人見栄を張るように声を張り上げるオベロンを他所に、裏では俺とキャストリア、そしてロリンチちゃんはこそこそと話し合っていた。
それらを少し離れた先で無言で見つめる先程の妖精が一人。
「わかりました。確かにその人間は〝普通の消耗品〟ではないようです」
「……特別に謁見を許しましょう。ですがあまり思い上がらないように。〝珍しいもの〟は見慣れてしまえば価値のないもの。謁見の機会はそう多くはありません、幸運を無駄に使わないよう」
コーラルとオベロンにそう呼ばれていた妖精は、どうやら俺たちを上の部屋へと招いてくれるようだ。
招かれるままにその部屋に行くと、そこには――
絵に描いたお手本のような外見を持つ妖精がいた。
薄い金色に輝く腰まで伸び切った髪に、春のような温かみを感じさせる背中の翅。黄色と赤が混じり合った暖色の双眸は、慈愛に満ち溢れる女神の如き視線を感じられた。
多分十人中十人が見たら必ずしも見惚れるに違いない。
本当に居るんだな、見惚れるほど綺麗な妖精ってのは……
彼女は元からオベロンがくる事を知らされていたのか、この部屋に来て早々に彼は話しかけられていた。まあ、オベロンが元々この機会を作ってくれたのだから当たり前と言えば当たり前なのだろう。
いくつかオベロンと話した後、
「はじめまして、オベロンのお客様。私は風の氏族の長、オーロラ。このソールズベリーの領主でもあります。――本日は私に何の訴えを？」
はじめは慈愛に満ち溢れた妖精なのかと思っていた。だが、それは彼女の側面に過ぎないのだと思わされるように、ほんの一瞬にして空気が変わった。
その変化にいち早く気づいたのはおそらくロリンチちゃんだろう。
ロリンチちゃんがこちらを見ながら、頑張れなんて表情をしながら

訴えかけてくるものだから、これは俺が言うしかないんだと悟った。
言うべきこと、言うべきこと……
ああ、そうだ。
藤丸立香が、怒ることもなくただ人の夢の中に出てきて、勝手に俺に託して消えやがったアイツなら。
一番に優先すること、それは――
――人捜しで困ってて。何か知ってることがあれば教えてください……！
どうやらそれが彼女――オーロラに受けたのか。
放たれていた重圧感、それは唐突に消え失せた。
「まあ！人間の方に、そんな気さくに話しかけてもらえたのは何年ぶりかしら！」
「あなた、お名前は？もしかして自由市民かしら？血統書はどんな――ああ、ごめんなさい。あなたの従者なのね。私ったら失礼な事を」
妖精の方にこんなにも口早く語りかけられたのは、これが初めてですよオーロラさん……
若干目の前のオーロラさんのテンションに引きつつ、オベロンの方を振り返って助けを求めた。
「こらこら。弱ってる人間を見たらすぐに保護したがるクセは止めたほうがいいよ。そのうちブリテン中の人間ぜんぶソールズベリーに住むコトになる」
「でも、その子の目がね、助けを求める子犬のようだったから、つい……ね？」
「まったく――前に話したこと覚えてるかい？汎人類史という異世界とカルデアという集団のコト。彼はそのカルデアから来たマスターさ。後ろの二人は妖精じゃなくサーヴァント」
それを告げるのはあまりにも早いんじゃないかという目でロリンチちゃんはオベロンを見つめる。
「大丈夫、彼女は妖精國の妖精だが、考えは僕たち汎人類史の妖精に近いものだ。そこまで警戒する必要はない――」
異聞帯と汎人類史は相反する世界だ、お互いにお互いを受け入れら

れないものなのだ。
話し合いはできる。だが、俺たちは異聞帯を壊して、汎人類史を救う存在。本来なら下手にこの事を告げるのはオススメされないのだが……
それから、オベロンとオーロラ、そして俺たちの会話は続いた。
その会話の中で、オーロラは約束してくれた。
ノリッジ以外の他の街にいる風の氏族達と連携して、マシュ捜しに協力してくれることを。
後でコーラルと言う妖精に特徴を伝えなくてはいけないのだが、それさえできれば後は各地に散らばる風の氏族からの連絡を待つのみ。
無理に移動せずとも捜索が可能ということだ。
これならば、並行して異聞帯の調査も出来る。
でもやけに親切だから、この後何があるのやら不安で仕方がない。
念の為、本当にいいのか？と聞いたのだが、返ってきた答えがこれだ。
「私は、妖精國の存続よりも私たち妖精の在り方を大切に思うのです――女王陛下はとても立派な方ですが……このままだともっとよくない結果が待っているでしょうから……」
何を考えているのやら。
綺麗でキレ者な妖精って印象だったが、さらに意味深を付け加えたい。
ついでにモルガンのある程度の強さも知ったのだが、指先一つで風の氏族全滅は流石に笑えない。
世紀末救世主伝説ならぬ、女王歴モルガン伝説だ。
ただでさえ妖精は強いってイメージなのにその妖精達を指先一つで全滅って、強すぎるだろ。
それと同時に、オーロラは『予言の子』でもない限り倒すことはできないと言う。ここにくる前にも聞いたあの予言の内容と同じことを言っていた。
予言の子を待っているという発言に、オベロンはこれ見よがしにアルトリアが『予言の子』であるアピールを始めようとしたが、キャス

トリアがそれを察したのか、オベロンに体当たりをかます事で物理的に阻止した。流石、物理攻撃もいける魔術師だ。
素人目から見ても、見事な体当たりで実に惚れ惚れする。
だがオーロラによると、例えキャストリアが『予言の子』だとしてもそれを信じられる要素が少ないと言って、この街の鐘は鳴らさせないとの事だった。
それでも鳴らしたいのならばと、交換条件として、俺とキャストリアの二人で希望を示して欲しいと言われた。
それは――この國で百年に一度起こるとされる『厄災』。それも数ヶ月前に港町に渦巻く巨大なモース流の『厄災溜まり』とやらを打ち払う事だった。

▽

まだ日の明るい、と言っても空は相変わらず夕暮れのように赤い。
そんな中、酒場の二階にある俺の部屋に、ロリンチちゃんとトリスタン、そして俺の三人は昨日と同じように今後の対策を話し合うことになった。
「さて、報告も終わったことだし。私たちはこれまでのおさらいだ。と言っても議題はモルガンの事ではなく――」
「……『予言の子』、つまり彼女の事ですね？」
「そうだね。名前が同じなだけと思考停止していたけど、紛れもなく彼女は異聞帯（こっち）のアーサー王だ」
「藤丸君も知っているが、カルデアは一度第六特異点でアーサー王にまつわる伝説と対決した。
復習がてらここでアーサー王伝説を説明するね」
そう言ってロリンチちゃんによる、アーサー王伝説の説明が始まった。途中トリスタンによる解説もちょいちょいあったが、それは割と簡潔に纏められていて、すうっと頭に入ってくる程に分かりやすかった。
終わった頃には既に辺りは暗くなっていて、夜を迎えた。結構長い

時間聴いてたんだなと、あの話を聞いて尚興奮している自分が居ることに気がついた。
「藤丸君、やけに楽しそうに聞いてたね？
こっちも説明し甲斐があるというもの――さて、以上を踏まえて話を、このブリテン異聞帯に戻そう」
「汎人類史のアーサー王は『選定の剣』を抜いて、王の座を駆け上がった。一方、異聞帯のアルトリアはまだ誰にも認められていない状態だが、『選定の剣』の代わりに『選定の杖』を持ち、『予言の子』として一人、ブリテンを旅していたようだ」
「ここまでくるともう疑いようがない。アルトリア・キャスターはこの世界におけるアーサー王だ。ブリテンを救う救世主。それを人々に求められる立ち位置として……ね？」
この話を聞いていて分かったことが一つ。
どうやらキャストリアは、あの時俺が想像していたものを遥かに超えるモノを背負っていたという事だ。
汎人類史側のアルトリアはまだ選ぶ権利があった。
それでもアーサー王として生きることを選んだ。
だが異聞帯側のキャストリアはその選ぶ権利もなく、ただ生まれた頃から『予言の子』として妖精達の期待と希望を背負わされている。
藤丸立香と待遇がどこか似ている。
そして藤丸立香の代わりとして生きている俺とも――

通りで親近感的なのが湧くわけだ……

未だ、モヤモヤとしたものが心の中に渦巻きつつある中、数時間にも及んだ会議は終わりを告げた。

七話

▽

こんな時、主人公ならば――藤丸立香ならば、どういう行動をしていたんだろう。

力なく倒れ伏した俺の目に映るは、火の海に成り果てた人間牧場。

怨嗟のように燃える炎を発生させた主は、揺れ動く炎の中に一人佇む。

そいつは、およそ二メートル近い身長を持ち、その身は複雑な形をした白銀の鎧を纏い。手には青白く不気味に輝く鎖と、今も尚炎を放出している黒き大剣。鎖の先には影を模した犬のような生物が繋がれており、彼女に付き従うように大人しい。

そんな彼女の名は――妖精騎士ガウェイン。

女王モルガンが任命した三名のうちのひとり。

そして、俺たちは妖精騎士ガウェインと遭遇した後に対決し、文字通り――敗北したのだった。

サーヴァントであるロリンチちゃんやトリスタン。

それに妖精であるキャストリアでさえ、あいつには敵わなかった。

俺も魔術礼装をフルに使用し、援護に徹したがそれでもダメだった。

俺以外の皆んなは辛うじて立ってはいるが、ほぼ満身創痍に近い。

まだロリンチちゃんだけは余力を残しているが、それでも妖精騎士ガウェインに敵うかと言われると無理だ。

こちらの切り札である令呪ですら、あの妖精騎士ガウェインによって食われたせいか、一時的に使用不可ときた。

しかも令呪ごとこの身体の魔力をごっそり食われたおかげで、着ている魔術礼装もろくに機能しなくなった。

そして、俺の意識も朦朧とし始めていた。

多分、自力で立って逃げる力も残されていない程に。

今いる人間牧場に人間が収容されたと情報を教えてもらったその日、俺たちはソールズベリーの兵士にここまで案内してもらう事となった。

中までは着いてくることはないとのことだったが、それはそれで感謝しつつも、俺たちは人間牧場内部へ侵入してマシュを捜した。

だが侵入したことが一瞬にしてバレ、中身妖精の騎士との連戦に続く連戦を行うことになった。

戦闘で消耗した俺たちの前に、多数の兵士を引き連れた妖精騎士ガウェインが現れ――今に至る。

妖精騎士と遭遇してしまったのは、まさに運が悪かったとしか言いようがない。

妖精騎士ガウェインでこれなら、他の妖精騎士達も――

不味い。非常に不味い。

こんな所で終われるわけがない。終わっていいわけがない。

なんとかして立ち上がらなきゃいけないのに、この身体はいうことを聞いてくれない。

くっそう、なんでだ。

なんで動かないんだよ……

自身の頭が徐々に働かなくなり始めた頃、立っているのも間々ならない筈のトリスタンが妖精騎士ガウェインの前に立ちはだかった。

妖精騎士の鎧に千切れぬ無数の弦を張り付かせ、その行動を一時的にとはいえ封じた。

俺たちが逃げる時間を稼ぐべく、その身を犠牲にすることを覚悟して。

「ダ・ヴィンチ、アルトリア。ここは私が食い止めます。その隙に藤丸を連れ、街の外へ！」

ダメだ……

「……ああ、いいとも。正直きついけど責任持って逃げ延びるさ。藤丸君は私のアームで運ぶ。立ってくれアルトリア、悪いけど君までは運べそうにない」
「――」
キャストリアは、分かっていたのだろうか。
一瞬言葉を紡ごうとしたが、それを口にすることを良しとしなかった。
「なに、卿に対する切り札も考察済みです。うまくいけばすぐに追いつけるでしょう……」
「……お早く、我が王よ。貴方の旅はまだ始まってすらいないのですから」
ロリンチちゃんが背負っている鞄から出現したアームに俺は捕まれ、横たわっていたその身体は中を浮く。
「――っ」
「準備はできた、ついてきて！」
「できてないのなら置いていく！それくらい分かるだろう!?」
少しずつ遠ざかっていくトリスタンの背中へ、手を伸ばそうとするのだが――届かない。届くはずもなかった。
藤丸立香ならば、もっと上手くやれていたのだろうか。せめてあの時、マシュが此処にいないと分かった時点でさっさと逃げていれば、こうなることはなかったのかも知れない。
薄れゆく意識の中で、もう姿が見えなくなってしまったトリスタンを思い浮かべ、俺は気を失った。
どうして、俺はいつも……

▽

意識の無い身体は、ガタゴトと揺れる地面に呼応するように動く。

乗り物にでも乗せられているような感覚に、酷く懐かしさを感じつつも、一度手放した意識をここに来てようやく取り戻した。
ああ、そうか。
俺は、俺たちは――トリスタン一人を犠牲にしてようやく生き延びたのか。
追いかけると彼はあの時言っていたが、多分無理だ。立つのがギリギリだったトリスタンがあの妖精騎士ガウェインに逃げ切れるとは思えない。こちらが連戦で消耗してたとはいえ、あの三人でかかっても倒せなかったのに。
くそ、どうして俺は、取りこぼしてしまうんだろう。
この異聞帯で早くも頼りになる汎人類史側のサーヴァントを、こうも早く失っちまうなんて。
あんまりにも、別れが早すぎるよ。
「よかった、目が覚めたようだ」
二、三日顔を見なかったオベロンがそこにはいた。
「……どうする、今なら何も無い。妖精騎士も帰還しているし、追悼ならできるだろう。それでも、牧場に戻るかい？」
今すぐにでも追悼するべき――ではないよな。
でも、俺は……
あー、もう！考えるのはやめだ。
これ以上考えたって、トリスタンがけろっと何にもなかったように帰ってくるわけでもないんだ。
今はただ、前を見よう。
――追悼は、後。今はマシュとの合流が先決、でしょ……？
みんなを心配させないように、俺は俺を偽る。
藤丸立香がそうであったように。
俺も藤丸立香のように、偽ろう。
「そうだね。彼は我々を後退させる為に死力を尽くしたんじゃない。前に進ませる為に戦ったんだ。報告はマシュと合流してからでも大丈夫さ」
「ところで！どうだった？狙い澄ましたようなタイミングだったろ？

まあオーロラから無理言って借りた馬車なんだけどね」
オベロンの馬車発言にどういうことだと思い、しっかりと見ていなかった周りをよく見れば、そこは本当に馬車の中だった。馬が見覚えあるような気もしないが、放置しておこう。
てか、俺はいつの間に馬車の中に入ったんだ。
待て、よく思い出せ。
確か俺はロリンチちゃんに運ばれながら、トリスタンの後ろ姿を見えなくなるまで見続けて、それで――気を失ったんだ。
此処までは覚えてる。
オベロンは確かこう言ってたよな。
馬車を借りてきたって。……無理言って。
今度は何をしたんだろうと思いながら、オベロンの話に耳を傾ける。
「さて、僕たちが今向かってるのは、ここから北へ一日程で着けるグロスターの街。そこでは毎日のように珍品や希少品のオークションが行われてるんだけど、そこにとびきりの商品が入ったらしい。
それはね――」
『鉄で武装した珍しい妖精』
オベロンが言ったそれは、やけに曖昧な表現で例えられているせいで、正直それがマシュなのかどうか疑わしいなと思い始めてる自分がいた。
さっき起こった事でより警戒してるんだろうな、俺。情報をあまり鵜呑みにしすぎないようにしないとなぁ……
でも、結局本物かどうか確かめにいかなきゃいけないのよね。もしもそれが本物だったりしたら、俺は一生後悔するしかない。それに、憑依してしまった藤丸立香に顔向けできなくなるしな。
……今度こそ、今度こそは間違えないようにしないといけない。第二・第三のトリスタンを出さない為に。
「それに加えて『名無しの森』からやってきた商人が連れてきたみたいで、どうやら早ければ明日にでもオークションに出されるらしいね」
「おお！『名無しの森』で、『鉄で武装した妖精』とか！」

「ああ、間違いない！今度こそマシュだ！」
でも、普通なら盾を武装したでいいような気がするのだが、何故鉄なんだろうな。名無しの森、まではあってる気がするんだが。
――なーんか、期待しすぎてもし違った時の反動が、ちょっと……
「ええー、ここでそれを言っちゃうの藤丸君？」
――いやぁ、二度あることは三度あるってよく言うじゃないですか
「た、確かに……！」
暗い雰囲気を明るい雰囲気で塗り替えて、気分を切り替えて笑う俺たち四人。
妖精馬さんも一緒に話に入ってきて、何気ない会話をこれでもかと楽しんだ後、
「さあ、グロスターへ行こうじゃ――」
「――すみません。その前におひとつよろしいでしょうか、ぶるるん」
オベロンの掛け声をぶった斬る、妖精馬さんではなく――レッドラ・ビット。
なんだ、このどっかで見覚えのあるレッドラ・ビットは……？
「な、なにかな馬くん。こっちはとてもいい雰囲気だったんだけど……？」
ロリンチちゃんの横で、そうだそうだと言わんばかりに反応するオベロン。
「ブリテンでもっとも紳士な暴れ馬ですが、私は私が主と認めたものにのみ背中を預けます。ここまではオーロラ様のご命令で牽引しましたが、グロスターに行くのであれば――
そう、わかりますよね？」
「に、ニンジン……ですか？」
震える声で、その手に持ったニンジンを渡そうとするキャストリア。
どこから取り出したんだ、そのニンジン。
「いえ――

バトルです！」
人生初の妖精馬とのバトルは、こうして始まった。
馬とのバトルって、一体なんなのさ……

妖精馬とのバトルの結果はこちらの勝利で事なきを得た。結構い試合を繰り広げたと思う。
ようやく魔術礼装の扱い方にも慣れ始め、的確に強化を繰り出せるようになった。

「皆さん、もうじきグロスターです。私はこう見えて牙の氏族ですからグロスターには入りづらいので、この辺りで野宿していますのでお帰りの際はお呼びください」
念入りに、自身が牙の氏族であることを強調した妖精馬さんだった。
「よし、ここで一旦別れよう。僕とダ・ヴィンチ、キミとアルトリアの二グループ。オークションは夜だ、それまでは自由行動ということで。ソールズベリーで稼いだお金はグロスターでも使えるから自由に使うといい。――なに、デートと思って過ごしてればあっという間に夜さ」
勝手にグループを決められ、オベロンとロリンチちゃんの二人はグロスターの街へと行ってしまった。
「――」
――はぐれないように手、繋いでいく？
「わたしは子供じゃないですよ!?」

▽

――ここが、グロスターの街……
ソールズベリーとはまた違った街。
遠くのものが大きく見え、近くにあるものが小さく見える。そんな摩訶不思議な街。それがグロスター。

キャストリアによれば、時にはピンクの雨が降り、大通りにはたくさんの虹がかかったり。後は謎の性転換が起こったりと、流行がハイペースで変化するのだと言う。
この街で流行ったものを順に話す彼女は、楽しそうに、恥ずかしそうに、それらを話すのだから聞いていて楽しくなる。
途中通りすがった妖精の人にあることを言われた際、キャストリアの顔は宇宙を感じて逆に虚無になる猫のようだった。その顔は俺に効くから是非ともやめて欲しい。笑いを堪える腹筋が死にます。
また、大ネズミとの戦闘もあったが、これもまた街の特性のようで、大きいものが小さく、小さいものが大きくなるように。小さいネズミは大きくなるのだと肌で実感させられた。
お礼としてどこぞのデパートの割引券をもらったのだが、
「……まさかの閉店、……はは」
と、割引券の対象だった店が物理的に閉まっており、結局それは使えずに終わった。
「わあ、もう新しい店が準備中なんですって……ブランド名は聞いたことないけど、ショウウィンドウに並んでいる商品みんなカッコイイ！ほら、見てくださいよ〇〇！」
店頭に飾られている商品を見てキャッキャと騒ぎはしゃぐその様は、やはりキャストリアも一人の少女なのだろう。カッコ良さに目がいってるあたり、目の付け所が分かってると思う。
「ほしいなぁ……でもお高いんですよね？
うぅ、わたしにはもったいないかなぁ……！」
「彼処のワフク？っていうの絶対〇〇が着たら似合いますよ！……ワフク姿、いいなぁ」
楽しそうに商品を眺めるキャストリアだったのだが、突然その横に現れた赤髪の妖精は言う。
「わかってるじゃんか。目の付けどころ、悪くないぜ。でも、ちょっと静かにしてくれる？私、いま目立ちたくないの。お忍びできているから」
「ご、ごめんなさい……小さな村の生まれなので、つい……」

「ああ、そう。なに、もうすぐ『厄災』がくるから死ぬ前に都会に来たってコト？運が良かったわね、アンタ生意気なグロスターの妖精じゃなくて」
そこから暫くは二人の会話になるのだが、途中赤髪の妖精がなにやらこちらをじろじろと見てくるのだ。嫌な予感がした。俺はその視線を避けるべく、そろりそろりとキャストリアの背中に避難した。
「わたしも〇〇もちょっと都会の妖精に慣れてなくて……あはは（なんでわたしの後ろに隠れてるんですかー！）」
――（ガードベント）
「（……）」
いとも容易く行われるえげつない行為に、不満そうな顔のまま無言になるキャストリア。
「ふーん……慣れてない、か。そっか、それで私を見ても怯えないのか。……でもなんだろ。それだけじゃないわ……」
「……ま、そういう日もあるか。今日はこれからオークションだしね」
オークション。
例の、名無しの森からきた商人にオークションに出品された鉄を武装した妖精が今夜出される場所。
招待状が無ければ入れないとの事だが……
俺が考え事してる間にどうやら赤髪の少女は行ってしまったようなのだが。
呆然と立ち尽くすキャストリアは、とても見てられるものじゃなかった。
――まあ、そう言うこともあるさ
「……さっき身代わりにしたコト忘れませんからね……！」
――ご、ごめんって！許して、なんでもするから！
「――い、今なんでもって」
――言って、ないです

そして夜になり――

「はい、これ招待状ね」
　ああ言って、招待状とされる紙をひらひらと見せてくれるオベロン。
「目玉商品であるマシュはおそらく最後だ。こちらの持ち金は７０００万モルポンド。偽札だけど今夜いっぱいバレなければどうということはないさ」
「問題はなみいる好事家相手にこの金額で競り勝てるかって話だ。まず負けない資金だけど、今回は商品名が商品名だからなぁ……」
　言ってることが完全に詐欺師まがいなんだが。
　これ、バレたらオベロンが文字通り裸の王様になってしまうのではなかろうか。想像したくない。
「７０００万って……お屋敷が使用人ごと買える金額ですよね？それでも足りないって、出品される『妖精』は一体どんな商品名なんです？」
「どうか、驚かないで聞いてほしい。『鉄で武装した妖精』『異世界からの旅人』そして――
『新しい予言の子』なんだってさ」

八話

▽

結論から先に言わせてもらうが、オークションに出品されたのは、こちらが思い描いていた盾ならぬ鉄を武装した妖精ではなかった。

文字通り鉄の盾ではなく刀を武装した、妖精ではなくサーヴァント。それも異星の神が召喚したクラスアルターエゴの方の千子村正だった。

二度あることは三度あるとはよく言ったものだが、まさか俺が馬車の中で言ってしまった事が、本当に起こるとは思いもしなかった。

つまるところ俺があの時言ったせいでフラグが建設されたということだろう。くそ、言わなきゃ良かった。

でも、言わなかったところで、この結果は変わらないという事は理解している。

人並みのそれもサイズ感のあるやたら豪華な檻に閉じ込められた村正のじっちゃんを見た時、驚きのあまり俺は思わず、おじいちゃん!?って、毎年開催する夏のイベントストーリーを読んで別の意味で驚かされるあの感覚で、つい声をあげてしまった。

どうやらその声は村正には聞こえていたのか、モグラ叩きのモグラもびっくりな反応速度で「じじいで悪かったな」と怒鳴られてしまった。

檻から出られない事を知りながらも、怒りが収まらないのか威勢よく何度も何度も鉄格子を蹴り立てていた。まるで猛獣でも囚われているんじゃなかろうかと錯覚するほどの暴れっぷりだ。

それを見たロリンチちゃんは、たまげたと言わんばかりに片手を頭に置いて、こう言った。

「どうしてこうも面白い状況になってるんだろうね、異星の神の使徒ってやつは……」

全くもって、同意見です。

傍観者としてのＦＧＯプレイヤーのネタにされるリンボ然り、目の

前の村正然り……
会場内は例の予言の子に胸を躍らせていた筈なのに、予言の子と何も関係がない村正が出た瞬間にこれじゃない感を醸し出し始め、オークション最後の目玉商品が台無しになりかけていた。
オークションが始まる前つまりは村正が隠蔽されていた時は、賞金レート額がかなりの高額――１０００万位から始まるんじゃないかと思っていたのだが、やはり予言の子ではないせいか、そんな馬鹿みたいな金額から始まりはしなかった。
それでも村正の鍛治師としての腕を買っているのか、欲しがる妖精は少なからず居るようで、序盤は皆様子見として１００万程で始まった。
それでも高いあたりこの場にいる妖精達は皆金持ちなのだろう。
１００、２００、３００、と順にいったところで、しばらく様子見していたオベロンはこれはいけると確信したのか先程の３００を倍にし、それにさらに１００を足した７００万でついに勝負に出た。
これでようやく決着かと誰もがそう思った。俺も思った。
７００万という破格の値段で購入される村正とは一体……
――瞬間。聞き覚えのある声の妖精が１０００万を叩き出した。
これには流石のオベロンも競り合いの負けを予感したようで、すぐ様降りようとした。
だがそれをキャストリアは良しとしなかった。
なぜなら――彼女は負けず嫌いだからだ。
相手が１０００万を叩き出したからなんなのだ。
ならば上からねじ伏せるまでだ、なんて雰囲気でオベロンが持っていたマイクを取り上げ、相手の倍の金額、つまりは２０００万を出すと高らかに宣言した。
これは熱い。いいぞ、もっとやれ。
先程１０００万を叩き出した相手はどうくるのかと、様子見でもするのかと俺はキャストリアの顔を伺うのだが、どうやら今の彼女の頭の中には馬鹿みたいな金額を出した相手に対し、絶対に負けないという事しか詰まってないのか、面倒だと一言呟いた刹那――こちらが

否、オベロンが出せる最大の金額、７０００万をついに宣言してしまった。
え、もうこれ以上を出されたら負けでは？とオベロンに目線を寄せるのだが、どうやらオベロンもこちらに視線を寄せてきてこう訴えかけてきやがった。「彼女は猪なのか!?」
もう知らん。俺は知らんぞ。
オベロンがキャストリアに主導権を握られたせいだからなと、哀れみの視線を送り返し、とりあえずもうこれ以上は無理だとそれは滾りまくっているキャストリアを宥めにかかろうとした頃。
これをさらに上回る金額を宣言した相手側。
よくこちらの金額をゆうに超える程のお金を持っているなと感心しつつ、宣言した金額を聞いてみれば一億。俺の耳は腐ってしまったのだろうかと、頼りのロリンチちゃんを見るが、かぶりを振られた。
一億。これはもう負けでいいだろと、燃え上がる火事を鎮火すべくキャストリアと言う名の炎を消火しようとするが、俺程度の水ではキャストリアの中で発生した火災は止められなかった。
「なっにおう、まっけないぞー！そっちがその気ならこっちは――オベロンの土地を担保に一億１００万ポンドだぁーーーーっ!!」
彼女は一億という名の限界速度へと達し、ついにはオベロンの土地を担保にするという荒技まで駆使して、一億１００万ポンドという速さの向こう側へと至ってしまった。アクセルシンクロ？ちょっと何言ってるかわかんないです。
どデカい金額の流れを横目に、それが行き交うあまりの速さに冷や汗が流れ落ちる。
これがオークションなのか、と若干誤解しそうになるが、実際のオークションも相手が出せない金額をこちらがマウントするかのように叩きつけて諦めさせて勝ち取るというのが常套手段だから、あながち間違ってはいない気がするのは何故だろう。
でも相手側はここまで粘ってくるキャストリアに多分戦慄を覚えていることだろう。
ちなみにお隣のオベロン閣下は「狂っているのか!?」と言い出す始

末。その横でロリンチちゃんは口元を隠し、いかにも笑うのを堪えてる感を出していた。
笑ってないで助けて下さい、カルデアの技術顧問。
オベロンの土地売ったらそんなに行くの？とついつい気になったので聞いてみれば、オベロンは、
「僕の土地を売ってもそんなに値段はしないよ!?せいぜいが１００万程度さ……って、間違えても売らないでくれよ!?」
これでついにオークションに決着が付くかと思いきや、司会者がもう手に負えないと言って主催者側に助けを求めた。それに答えた主催者側は言う。
『これ以上となるのであれば買う側には財力だけではなく品格も求められる』のだと、残った対戦者二人をまるで誘き出すように盤上へと呼び込んだ。
罠だなって思っていても今のキャストリアは俺ですら止められないのだ。もう誰にも止めることなどできぬ、絶対勝利の金獅子と成り果ててしまったのだから……
ボーイミーツガール小説ばりに、キャストリアは俺の手を引いて、為されるがままにステージ台へと連れられてしまった。
気付けば俺たち二人は、いかにも目立つ立ち位置の台の上で、並み居る妖精達の視線を集中して浴びる事になっていた。
でもそれらを前にしても、俺は不思議と怖くなかった。なんでだろう。似たもの同士と俺は勝手に思ってはいるが、そんな彼女と一緒にいるからだろうか。
多分、俺の手を握るキャストリアもそう感じているのだろうか。この手を握る彼女の力が少し強まった気がした。
彼女の翡翠色の双眸には熱き翠の炎が宿る。
まるで俺と一緒に戦おうと言わんばかりに、その双眸は揺らめく。
「一人だと心細かったんですよ！でも、○○とならこの勝負わたし達の勝ちだ！」
ダメです！
それフラグっ!?なんてこの雰囲気の中でそんな事言えるわけもな

く。
俺たちが盤上へ上がったのをきっかけに、相手側もようやくこの妖精達の視線集まるステージへと上がってきた。
その相手側の姿は――どこからどう見てもこのオークション会場に来る前に一度あったあの赤髪の妖精そのものだった。
赤髪の妖精が纏う雰囲気は、彼処で一度見ていたからよく分かる。下手な妖精が持っていいものではないという事だけは確か。
触れれば切れるナイフの様に、心を許した相手以外は気に入らなければ切り殺すという、そんな雰囲気を持っていたのだから。
あの時、嫌な予感がしてついキャストリアをガードベントもとい身代わりにしてしまったが、あの判断は恐らく間違いではなかったと今は確信して言える。もしも、なんて思ったら俺は間違いなく殺されていた筈。その事に、あの時まともにそれを感じていたキャストリアなら気付いているはず。
そんな中、主催者側が赤髪の妖精の名を告げる。
レディ・スピネル。
又の名を――妖精騎士トリスタン。
妖精騎士ガウェインときて、次は妖精騎士トリスタンときたか。前に一度三人の妖精騎士について知る機会があったから名前までは知っている。
だが、こうも連日して妖精騎士と遭遇するなんて思いもしない。しかもそれが昼間の妖精ときた。
思わず互いに顔を見合わせて苦笑いと冷や汗を浮かべる俺とキャストリア。
もしかしたら次に会うのは妖精騎士ランスロットじゃないのかと先行く未来に不安になりつつも、相手側の紹介を終えた主催者側は今度は俺たちの事を紹介し始めた。
「対するは、女王陛下と同じく独学で魔術を扱い、あのウッドワスの包囲網から奇跡的に生き延びた本物の『予言の子』。見て下さい、その手にはあの『選定の杖』が。……そして『予言の子』に付き従う者こそ外の世界からの来訪者、汎人類史からやってきたマスターこと、藤丸

立香という人間です」
どこか悪意ある表現で見事に正体バレをかましてくれやがりました主催者側には悔い改めてと願いながらも、俺自身もテンションがかなり変な方向になりつつある事を自覚する。
それはそうだろう。
妖精騎士ガウェインと同じ妖精騎士が、今目の前にいるのだから。
心臓の鼓動は通常時よりも、やや早く脈打つ。
ドクリドクリと音を立てているのが分かる。
今度は間違えない。
二度と取りこぼさないためにも。
この場を、どうにかして俺は切り抜けなければいけない。今度こそあの藤丸立香の様に……
俺の意思を汲んだかどうかはさて知れず、主催者側はキャストリアと妖精騎士トリスタンの価値を同格とみなし、優劣を競うことができないと嘆くが突然俺にターゲットを切り替えたのか、どちらに価値がありますか？なんて変化球を投げてきた。
どっちかなんて、そんなもん決まってる。
――アルトリアいや、キャストリアだ
見ず知らずの妖精と、友達の妖精どっちを選ぶかなんて当たり前のことを聞いてくるな。
そう主催者側の声が聞こえてくる方を睨みつける。
当然相手側は価値が無いと俺に言われたも同然な訳で、「ぶっ殺すぞ、テメェ！」って言われるのはごく自然のことだと……思いたいです。
その言葉とともに今も溢れんばかりの殺気が、俺の肌をピリピリと痺れさせる。
あのガウェイン戦とは、また違った恐怖が俺を追い立てるように襲う。
怖くない、と言えばそれは嘘になる。
だが怖いなんて言ったとして、俺が救われるわけでもないというのが現実だ、実に厳しくできてる。

現実が優しくできているのならそもそも俺がこの世界に来ることが間違ってると言えるがそれはさておき。
そして主催者側はついに決着の内容を決めた。
それは魔術。魔術の扱いを競う。それが決着の内容。
より魔術に優れたものが勝てる戦い。
あのマーリン魔術が使用可能なキャストリアにとっても有利な勝負になったという事は言うまでもない。
結果はこちらの勝ち。それも圧勝だった。
相手側の敗因は一つ。手持ちの魔術品の品切れだ。
その隙を突きマーリン魔術で妖精騎士トリスタンをいとも容易く打倒する事に成功してしまった。
妖精騎士トリスタンは己が敗北したという現実を受け入れず再戦を激しく希望するが、それは虚しく主催者側には響かなかった。
それどころか、主催者側は謹慎中にこんな場所に来ている事を女王様にチクりますよ？と、先生へチクり魔並みの事を言って、この場からすぐに追い返そうとした。
しかも言葉巧みに妖精騎士トリスタンを帰らせるように誘導するものだから、この主催者側、相当出来る類の者であることが窺える。
勝者がキャストリアとなった事により、たった今から村正はキャストリアの所有物となる。
よって彼を拘束していた檻は消え失せ、自由に翔ける鳥の如く翼の代わりに、腕を天へ伸ばし背筋をしゃんとする千子村正。
首を軽く鳴らして「どうなってんだ」と一言。
その仕草がやけにじじ臭いものだから、不審に思ったキャストリアは俺に耳打ちする。
「(〇〇、〇〇。見た目若々しいのに中身おじいちゃんですよ！この人！)」
「おい！聞こえてんぞ、誰が中身おじいちゃんだ！合ってるけど！」
否定するのかしないのか、出来れば俺的にはっきりして欲しいです。
「まあ、なんだ……捕まってた身としては助かったが。おまえさん、よ

く敵対する側の儂を助けたな」
――たとえ、助ける相手が敵対してたとしても、俺は俺だから。きっと助けてたと思う……
それにキャストリアのお陰という事をさりげなくつけ加えつつも、俺が本心に思ってる事を伝えた。
きっと藤丸立香でもこうしていた、はずだ。
「ほう……藤丸立香。おまえさん――

あの時とどこか変わったか？」
村正のその言葉に。
俺は一瞬、この体全体に鳥肌が立つ思いをした。
既にロリンチちゃんに以前の藤丸立香ではない事はバレているというかバラしたのだが。
それも一番知られたくもない奴ら――異星の神側のサーヴァントにその事がバレかけている。
いや――今はまだ。彼は考察段階に入っただけに過ぎない。その事には、まだ辿り着いていない。
鳴り止まぬ心音を深く沈ませるように、そう自分に言い聞かせた。
「……いや、儂には関係のない事だしな。悪い、忘れてくれ」
それからは席に座って村正が解き放たれるまでの一部始終を見守っていたオベロン達がこちらへと急いでやってきた。恐らく、心配になってここまできたのだろう。
一対四。
見るからにこちらが優勢なのだが、なにせ相手は異星の神が召喚せし三騎のアルターエゴの内の一騎
千子村正だ。油断はできない。そう思っていた矢先、オベロンが動いた。
なんと、お互いのモルガンを倒すという目的を利用して、一時的な協力関係を築いてしまった。
こんなんでいいのかと思いつつ、少しの間だが異星の神の使徒である村正が、頼もしい仲間になった。